インフィニット・ストラトス F

スカイマーク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女尊男卑と化した世界

そこで織斑一夏とその弟、織斑　晴人は誘拐されてしまった。

一夏は命がけで晴人を庇いこの世を去った。

しかし、命を落とした訳ではなかった。

一夏はマクロスの世界へと飛ばされたのだ。

目次

はじまり ―― 1
あれから、そして突然 ―― 8
モトノセカイ ―― 23
再会 ―― 39
弾とクロエ ―― 50
決意 ―― 57
蒼きスナイパーの復活 ―― 68
ヴァラヒア ―― 82
ドッグファイト ―― 104
新たな力 ―― 119
名前捨てた革命者たち ―― 125
革命を ―― 134
ヴァラヒアの襲撃 ―― 146
戦場での再会 ―― 162

はじまり

西暦２０５８年
人里から離れた夜の工場。
工場の中で複数の人間が銃の引き金を引き、複数の火花が放たれる。
晴人「うわ!!あぁぁ!!」
物影に隠れていた織斑晴人が悲鳴をあげ晴人の口を誰かが塞ぐ。
一夏「落ち着け!! 」
晴人の口を塞いでいたのは、同じ年である兄の織斑一夏だ。一夏は晴人を落ち着かせるため声をかけるが
晴人「で、でも･･･　僕達･･･ もう、姉さんに･･･」
晴人の目は絶望に染まり、生気がない。実は、さっき二人を誘拐したテロリスト達の口から姉である千冬が自分達を見捨て大会に出場したと聞かされたのだった。
晴人はそれを聞き諦めていたが、一夏は隠し持っていた針金で手錠を開けテロリストの隙をついて晴人の手錠も外して二人で逃げ今に至るのだった。
一夏は千冬の名を聞き、険しい顔をして晴人の肩をつかみ目を合わせる。

一夏「そんなの知るか!!　例え、あの女が見捨てたとしても、俺たちは生きるんだ!!生きて、生きて俺たちの存在を証明するんだ!!」
晴人「兄さん…」

「はぁ!!　何ガキ二人も仕留め切れてねぇんだよ!!」
突然女の声がしたと思えば、倉庫の壁が崩壊し一体のＩＳが出現する。そして、ＩＳのセンサーが隠れている一夏と晴人を感知してテロリストもろとも攻撃した。
一夏「クソ!!　味方もかよ!!　走れ!!」
一夏は晴人を立たせ二人は倉庫の出口まで必死に逃げるが、女性は二人に向けグレネードを発射した。
一夏「クソ!!」
一夏は自分達にグレネードが発射されたのを見て、前を走る秋人の背中を強く押し工場の外に出し、扉を閉める。
晴人「兄さん!?」
一夏「…　生きろよ…　例えあんな姉の下で生まれても、お前はお前だからな…」
一夏は晴人にそう伝えて扉に鍵をかける。そしてグレネードの弾が一夏の真後ろで爆発した。身を焦がす程の熱風が背中の皮膚を焼き何か抉り出るような感覚、衝撃で身

体が宙を舞う。
その時、視界から誰かの右腕も宙に舞っていた。
それは自分の腕だった。
一夏（・・・ あぁ、ここで俺死ぬのか・・・ 結局、俺は何もできなかったな・・・ ・・・クソみたいな人生だった・・・ あぁ、クソ）
意識が遠のいて行く中、一夏の体は地面に叩きつけられた。
そして一夏は意識を失った。
一夏達を攻撃していた女性は既に脱出し、誘拐犯達も殺されていたため誰も気づかない。一夏の目の前にブラックホールのような穴が出現し一夏の姿が消えた事を。

暗い暗闇の中少しずつ声が聞こえた。
最初はノイズのように聞こえて来た。
だが声とは全く別の別の音が聞こえた。
俺は誰かが歌っていると気づいた。

その時だった。
暗闇の中に小さな光が見えた。
その光は少しずつ大きくなり俺を飲み込んだ。

俺が目覚めた時、最初に見たのは白い天井だった。
その時点で俺はベッドに寝かされている事に気づいた。
更に横に心電図や色々な物が置いてあり左腕に輸血されている事に気づいた。
そして俺はここが病院である事に気づいた。
だが見た事もない物もあった。
起き上がろうとしたが全身に麻酔が回っていて起き上がれなかった。
その時、奥からドアが開く音が聞こえた。
誰かが入って来る。
そして俺の目の前に現れた。
???「どうやら目覚めたようですね。おはようございます。」
その人は女性だった。
キャリーウーマンの様な服を着てベレー帽を被っていた。
左手に見た事もない細いタブレットを持っている。

モニカ「私の名前はモニカ・ラング。ＳＭＳマクロスクォーターのブリッジオペレーターをしています。」
一夏「……ＳＭＳ?……マクロスクォーター?……」
聞いた事もない単語だった。
彼女、モニカは言葉を続けた。
モニカ「貴方はいきなりマクロスクォーターのブリッジで倒れているところを艦長が発見しここ軍事病院で治療を受け今に至っています。体の方は麻酔を打ってありますが完治しています。」
一夏「怪我……っ!?」
俺はＩＳを纏った奴から弟の晴人を庇って怪我を負った事を思い出した。
一夏「どのくらい寝てたんですか?俺。」
彼女は一週間と言った。
俺は唖然とした表情で左手を額に当てた。
すると俺はある事に気づいた。
右腕の方に目を向けた。
俺は目を疑った。
ロボットの様な腕、つまり義手が付けられていた。

彼女、モニカが言うには発見した時には右腕がなかったと言う。
だが彼女は言葉を続けた。
モニカ「貴方は手術が出来ないほど重症でした。なので貴方の骨格と筋肉を軍式の人工物に取り替えさせて貰いました。」
俺は疑ってしまう程混乱してしまった。
だがあの怪我をして当然だと思い直ぐ正気に戻った。
モニカは「貴方の名前を教えて下さい」と尋ねた。
俺は自分の名前を言った。
するとモニカは手に持っていたタブレットを操作し始めた。
モニカ「おかしい。貴方らしき名前が載っていません。」
俺はひとつ聞きたい事があった。
ここはどこの国なのかを。
一夏「ここはどこの国なんですか?」
するとモニカは驚いた顔でこっちを向いた。
モニカ「いえ…ここは国ではなくフロンティア船団ですよ?」
一夏「フロンティア船団?」
俺はまた聞いた事もない単語を聞いた。

だが「船団」と言う事は船だと気づいた。
だが俺はひとつ疑問に思った。
それはここが病院という事を。
モニカ「ここは巨大都市型移民船。環境艦とともに閉鎖系バイオプラントを形成する第５世代型宇宙移民船です。」
一夏「宇宙移民船!?」
俺は驚愕してしまった。
ここは国でも地球でもなく宇宙船だと言う事を。
恐る恐る尋ねてみた。
西暦何年かを。
そして
モニカ「今は２０５８ですよ?」
俺は異世界に飛ばされたと言う事に気づいた。
そしてここから俺は第二の人生が始まったのだ。

あれから、そして突然

あれから一年半と言う月日が経った。
俺は民間軍事会社「ＳＭＳ」に所属した。
きっかけは俺を事情聴取をしに来たＳＭＳ母艦マクロス・クォーター艦長「ジェフリー・ワイルダー」に「ご家族や親戚はいないのかね？」と尋ねられた事からだった。
この異世界に家族や親戚、兄弟と言うもののいない俺は艦長に「家族も親戚も居ない、俺は見捨てられた」と言った。
そもそも俺は姉に見捨てられたのだ。
そんな俺に家族なんか居ない。
あの時俺は酷く苦しみ怒り悲しんだ。
すると艦長は「では我々ＳＭＳに来ないか」と誘われ俺に手を差し伸べてくれたのだ。
俺は艦長の手を両手で握り泣きながら「はい」と答えた。
それから俺はオズマ・リー少佐率いる「スカル小隊」に所属し「バルキリー」と呼ばれる可変戦闘機に乗る為、訓練した。
丁度、スカル小隊の一員であるミハエル・ブランとルカ・アンジェローニも俺と一緒

に訓練した。
ルカは俺より一つ上でミハエルは二つ上だった。
ある日のことだった。
ルカは高校生になりミハエルは高校生二年生になった時、俺たち人間は未知の生物「バジュラ」と呼ばれる地球外生命体と遭遇したのだ。
バジュラは宇宙移民船団を次々と襲った。
当時、政府や統合軍はこの生物を「ビクター」と呼び、バジュラ自体は国民に一切打ち明けていなかったのだ。
そして一ヶ月後、このフロンティア船団中域に計六体のバジュラが出現しフロンティアを襲いに来たのだ。
統合軍の依頼で俺たちはバジュラを殲滅に向かった。
ミハエルとルカは「銀河の歌姫」と呼ばれる「シェリル・ノーム」のライブステージでＥＸギアを使ったスタントをしている為、遅れての出撃だった。
バジュラは最終防衛ラインを突破しアイランドｌに侵入した。
俺たちは必死の思いでバジュラを倒した。
なんとかバジュラを殲滅した。
大勢の人々を犠牲にして。

そして二週間後、ミハエルとルカの友人「早乙女アルト」がＳＭＳスカル小隊に入隊した。
それから四ヶ月が経ちある事件が起きた。
アイランド１に数え切れないほどのバジュラの幼生が現れたのだ。
その時俺は別の任務でフロンティア船団にはいなかった。
俺は知らないままフロンティア船団に帰ってきた時は無残な姿だった。
ルカとアルトは無事だった。
オズマ隊長はその時行方不明だった。
その時、ミハエルがいない事に気づいた俺はルカに尋ねた。
ルカは震えた声でこう言った。
先輩は死にました。

１年半共に過ごし信頼していた戦友の死。
バジュラたちが現れた時いつか俺たちの中で誰かが死ぬ事は分かっていた。
俺はミハエルの最期を黙って聞いた。

涙を堪えて

そして一週間後
フロンティア新政府はバジュラの母星を突き止めた。
燃料も食料も三ヶ月分も満たないフロンティア船団。
そこでフロンティア新政府はバジュラの母星を侵略し居住地にすると決断した。
だがジェフリー艦長はフロンティア新政府に違和感を感じた。
そして艦長はアルトやルカ、一部を除く隊員を残しマクロスクォーターでフロンティア船団を離脱し真実を探しに向かった。
俺はオズマ隊長に連れられ整備室に向かった。
整備室に入った時、一機の黒いバルキリー「ＶＦ―２７ルシファー」を見つけた。
ＶＦ―２５と同じくＹＦ―２４をベースとする兵専用可変戦闘機。
主翼にエンジンを搭載し合計四つエンジンを搭載し飛行の限界を超えた高機動性能を発揮する。
するとオズマ隊長は「ＥＸギアを搭載している、これをお前にやる。」と言った。
俺が使っているバルキリー「ＶＦ―２５Ｇ」はフロンティア船団から離脱し統合軍と戦った時にエンジンがイカれて現在修理中だった。
オズマ隊長は「修理人が出払っていてお前のバルキリーが直せない。その代わり上の

ヤツがこの機体を回して来たんだ。」と言ったのだ。
そして今、俺はルシファーのコックピットに乗り出撃を待っていた。
真実を知った俺はマクロスクォーターでバジュラの母星に向けてフォールド中だった。
現在フロンティア新政府はバジュラの母星に侵略を開始しておりフロンティア船団が危うい状況だと知った俺たちはフォールド終了後直ぐに出撃できるように準備をしていたのだ。
そしてアナウンスが鳴った。
『間も無くフォールドが終了します、各小隊は出撃して下さい。』
操縦桿を握りペダルを踏み滑走路に向かった。
俺はルシファーを一度も飛ばした事もない。
つまり今から行く戦場で初めて操縦するのだ。
前に滑走路に上がるエレベーターを待っているバルキリー「ＶＦ―２５Ｓ」が居た。
背中に盾と剣を配した牛の骸骨のエンブレムを持つ俺のスカル小隊隊長「オズマ・リー」（スカル１）だった。
するとチャンネルチャットからオズマ隊長が俺に話しかけた。
オズマ『一夏、覚えてるか？お前が初めてスカル小隊に入隊した時の事を。』

一夏「ええ、緊張でガチガチだった俺は隊長からスモークグレネードを喰らいましたね。」

オズマ『あの時お前はまるでお人好しの子供だった。だが日に日に成長し子供からガキになって今は男、お前はもう立派な男だ。だから…死ぬな！俺たちと一緒にフロンティアに帰るぞ！』

その言葉を聞いて俺は安心した。

そして俺はオズマ隊長にある事を言った。

一夏「隊長、実は俺、別の世界から来たんですよ。俺には姉と弟がいて三人で仲良く暮らしてたんです。けどある日、女性にしか使えないアーマードスーツが誕生したんです。その所為で男女の社会的パワーバランスが一変して女尊男卑が当たり前になってしまったんです。姉はそのアーマードスーツを来て世界大会で優勝したんです。そして世界から注目を浴び有名人になったんです。けど俺と弟は世界から周りから「姉の付属品」「出来損ない」いろいろ呼ばれました。俺と弟はそれに耐えきれなくて姉に何度も相談しました。けど姉は「忙しい」「お前たちなら大丈夫だ」と何もしてくれませんでした。そんなある日の事でした。姉は世界大会連覇する為第二回世界大会に出場し決勝戦まで上り詰めました。ですがその裏方、俺と弟は誘拐されましてある倉庫に連れられました。誘拐した奴らの目的は姉の決勝戦の辞退。俺たちは姉が絶対助けに来てくれ

ると思ってました。けど姉は決勝戦に出場しました。姉は自分の家族よりも名誉の方を大切にしたんです。俺たちは酷く姉を憎み悲しみました。そんな時でした。一体のアーマードスーツを纏ったパイロットが現れました。そいつは俺たちを助けに来たのではなくここにいる俺たち含め全員を殺しに来たんです。俺は弟を倉庫の外に出し庇いました。俺は奴のグレネードを喰らってしまいました。背中に大きな火傷を負い右腕を失いました。俺は意識を失いそして意識が戻った時にはこの世界に居たんです。」

オズマ『そうか……だからー　」

キャサリン『エンデュミオン４出撃完了、続いてスカル１出撃準備して下さい。』

エレベーターの台が下りてきた。

オズマ『話はこの戦いが終わってからにする。出撃したら直ぐ戦闘になる。気を引き締めろよ一夏。』

一夏『了解ッ！』

オズマ隊長のバルキリーが前に進みエレベーターの台に乗り、台はオズマ隊長のバルキリーを乗せて上に上がった。

ペダルを少し踏みルシファーをエレベーターの前まで詰めた。

オズマ隊長に全て話した俺は元居た世界の親友たち、そして弟晴人の事を思い出す。

弾…

鈴……

晴人……

元気にしてるかな……

2分後

エレベーターの台が下りてきたと同時にオペレーターの声が入ってきた。

キャサリン『スカル1出撃完了、続いてスカル4出撃準備して下さい。』

一夏「了解。」

ルシファーを台の真ん中まで進ませた。

そして台はルシファーを乗せたまま飛行甲板に上がった。

まだフォールド中で紫色の風景だった。

キャサリン『スカル4へ、あと15秒後にフォールドを出ます。その為フォールド終

了後の出撃となります。なのでそのまま待機して下さい。』
一夏「スカル４了解。」
フォールドの中で飛翔しているバルキリーたちは問題はないが、フォールドを出る瞬間に出撃したらフォールド波で機体がバラバラにされてしまう。
飛行甲板に上がった俺は操縦桿を握りルシファーを滑走路に移動させた。
機体の最終チェックをしてフォールドを終わるのを待った。
そしてフォールドが終了し、
キャサリン『フォールド終了！スカル４発進して下さい！』
一夏「了解！スカル４、一夏、出撃するッ！」
俺は戦場へと飛翔した。

フロンティア新政府であり大統領である三島は脱走しまた戻って来たＳＭＳにより真実を暴かれた。

そして戦場の真ん中に白いワンピースを着た巨大なランカ・リーが「愛覚えていますか」を歌っていた。
そこでクォーターはマクロスキャノンをランカに放った。
するとランカからノイズが発生し消え本性を現した。
バトルギャラクシーだった。
バトルギャラクシーがランカを映し出していたのだ。
アルトの証言でランカは人類を裏切っておらず、バトルギャラクシーにとらわれている事が判明した。
そして更にギャラクシーの上層部であるグレイス・オコナーとその部下はバジュラを乗っ取り全銀河を支配しようしていた事も分かった。
戦況は一気にこちらの方に逆転した。

だがしかし

バトルギャラクシーから無人戦闘機「Ｖ９」が無数射出された。
Ｖ９は有人機より遥かに高機動性能が高く次々とバルキリーが落とされて行く。
オズマ「クソッ！なんて速さなんだ！」

Ｖ９を撃墜するのに手こずるオズマ。
するとＶ字型に飛行する１７機のＶ９がオズマを襲い掛かってきた。
オズマ「チッ！」
オズマはバルキリーをガンウォークからファイターに変形しこの場から離れた。
だがＶ９たちはそれを追いかけ正確にビームガンポッドを連射する。
オズマは歯を食いしばり攻撃を避ける。
反撃しようと試みようとしたがちゃんと後ろにつかれて反撃出来ない。
オズマ「クッ！俺のケツにちゃんと食い付いて来やがる！」
そうしているうちに１７機のＶ９との距離が縮まっていく。
その時だった。
一夏『隊長ッ！』
オズマ機に近いＶ９が横からくる一発のビームで爆発し一機の黒いバルキリーが横切った。
それは一夏のルシファーだった。
すると残りの１６機のＶ９はオズマを追うのを止め一夏を追った。
オズマ『一夏ッ！』
一夏「こいつは任せて下さい！」

と言い一夏はルシファーのスピードを上げ飛翔する。
高機動性能の持つルシファーは、ほぼＶ９と同じ速さで互角と言っていい。
ルシファーを上昇させ捻り込みをしてＶ９の後ろを取った。
一夏「貰った！」
一夏はトリガーを引いた。
するとルシファーの両翼の付け根に計２門内蔵されているビーム砲「ＲＯＶ―２５」が放たれた。
放たれたビームはＶ９を２機破壊した。
残りの１４のＶ９は一夏と同じように捻り込みをし一夏の後ろを取る。
そして新たに３機のＶ９が増援に来た。
一夏「クソ！増援か！」
一夏はペダルと操縦桿を細かく素早く動かしＶ９の攻撃を避ける。
ルシファーを初めて操縦する一夏にとって心も体も辛い。
何故ならルシファーは高機動性能であり生身の人間には耐えられない高Ｇ機動に耐えきれるサーバーグラント（サイボーグ兵士）だけの専用の機体なのだ。
だが一夏は半分サイボーグで半分人間、つまりサイボーグの中間。
サーバーグラントは高Ｇ機動はなんとも思わないだろうが一夏にとって高Ｇ機動は

辛いのだ。
するとＶ９が二手に分かれ左右から攻撃を仕掛けてきた。
一夏は更にスピードを上げ機体を動かして避ける。
もの凄いＧが一夏に襲い掛かる。
一夏「グッ！」
攻撃を避ける度に今までのＧより遥かに超えるＧが体に来る。
Ｖ９は一夏の撃墜を最優先にしたのか更にＶ９の増援が一夏を襲う。
無数の敵をひとりで相手した事もない一夏は反撃よりもまずＶ９から振り切る事にした。
気がつくと戦闘宙域の端にいた。
すると１機のＶ９が前方にいる事に気づいた。
前にいるＶ９はルシファーに狙いを定め攻撃した。
一夏「クッ！」
一夏は避ける。
その攻撃は後ろにいる１機のＶ９に命中し前にいるＶ９をビームガンポッドで破壊した。
だが破壊したＶ９を避けきれずＶ９の破片が機体に当たった。

するとアラートが激しく鳴り始め左翼エンジンの出力が上がらなくなった。
一夏「クソッタレ！破片がエンジンに入ったか！」
ルシファーのスピードは下がってしまいＶ９に追いつかれてしまう。
その時だった。
突然前方にブラックホールのような穴が現れた。
左に回避した。
だが穴は掃除機のように吸引する。
一夏はルシファーをガウォークに変形して穴に逆らうように脚部を向けてブースターを最大出力で振り切ろうとした。
それでも穴の吸引力は抵抗するルシファーより上だった。
すると一夏の後を追うＶ９たちは攻撃しながら此方に来た。
一夏「ハッ！しまった！」
しかしその攻撃は穴に吸い込まれてしまった。
そして一夏に近づいたＶ９たちは穴の吸引力に引かれてしまいコントロールを失ってしまった。
ぶつかり合って自爆するＶ９もあればそのまま穴に吸い込まれるＶ９もいた。
一夏を追っていた多数のＶ９は穴に吸い込まれてしまった。

一夏「ウウウウウウウウ！」
唸り声を上げながらスロットルを上げ続ける一夏。
ガウォークからファイターに変形し主翼のブースターと脚部のブースター合わせて
四つのブースターで穴から離れようと試みた。
左翼エンジンの出力が上がらないが右翼エンジンがあるよりマシだった。
一夏「ぐぅぉぉおおおおおおおお！」
雄叫びを上げスロットルに力を込める。
すると機体が徐々に穴から離れる。
一夏「よし！このまま……しまった!?」

刹那
前方に破壊された空母艦の破片が穴の吸引力により此方に寄せて来た。
一夏は回避しようとした。
しかし機体のバランスを失ってしまった。
一夏「うぁぁぁぁぁぁ！」
そして一夏はルシファーと共に穴に吸い込まれてしまい気を失ってしまった。

モトノセカイ

一夏「ン……うぅ……」
ＶＦ―２７ルシファーに乗っているパイロット少年、一夏は目覚めた。
一夏「ここは……」
辺りを見渡した。
外は薄白くと濃い白色だけだった。
一夏「……雲の……中…」
一夏は雲の中だと分かった。
機体（ルシファー）は自動オートパイロットになっていた。
そして一夏は自分が穴に吸い込まれた事を思い出した。
一夏「そうだ！俺は穴に吸い込まれて……」
……ここは何処なのか？
一夏はモニターでマップを機動し何処の星なのか探した。
しかしフロンティアネットワークが繋がらない為現在地が探せなかった。
フロンティアネットワークの再接続を試みた。

接続出来なかった。
次にフロンティア船団の反応を探した。
結果、フロンティア船団の反応はなかった。
一夏「フロンティア船団の反応がない……まさか！バジュラに!?そんな筈はない！」
一夏はフロンティア船団がバジュラに襲われたと思った。
急いで他の船団の反応を探しフロンティア船団と戦況情報を集めた。
しかしどれもフロンティア船団と同じように反応しなかった。
一夏「7船団の反応もない……どういう事だ……」
あらゆる方法で試みたがどれも、フロンティア船団や7船団、他の船団の反応がなかった。
他の船団もフロンティアと同じように反応が消えていると言う事はフロンティアはまだバジュラに襲われてないと一夏は考えた。
すると一夏は操縦席にもたれ上を向き独り言を吐いた。
一夏「……一体……どうなっているんだ……」
この時まだ一夏は知らなかった。

自分が

元居た世界（地球）にいる事を

それから数分後、一夏は機体の損傷がないかチェックした。
するとさっきまで出力が上がらなかった左翼エンジンブースターが元に戻っていた。
「破片が取れたんだろう。」と一夏は呟いた。
オートパイロットから手動に変え再び操縦桿を握った。
一夏「とりあえずこのまま飛んでいるのもアレだから下に降りてみるか……」
そう言って一夏は機体を降下させ雲の中から出た。
青い海が広がっていた。
一夏はこの星の大気をモニターで調べた。
ほぼ地球と同じ大気だった。
一夏「この星は地球と同じ大気か……」

そう言って一夏はヘルメットを取って後ろの席に置いた。
すると南に3キロ離れた所に小さな島を見つけた。
一夏「よし、あの島に着陸しよう。」
一夏は操縦桿を傾けルシファーを島に向けて飛行した。
島に接近したルシファーは先回した。
島は熱帯雨林とジャングルで覆い尽くされていた。
だが人や建物といった物はいなかった。
一夏「やっぱり人は居ないか……とりあえずこの島で寝床を作ろう。」
ルシファーをガンウォークに変形し降下して海から離れた浜辺に着陸した。
コックピットのハッチを開けＥＸギアに付属している銃とサバイバルグッズが入ったショルダーバッグを肩に掛けて地面に降り、銃を構えた。
一夏「……」
数分後、一夏は銃を下げ周りの安全を確保した。
一夏「木の枝集めて火を起こそう。」
一夏は木の枝を集め向かった。

???「〜〜〜♪」

薄暗いラボの中でひとり無数のモニター画面に目を向けキーボードパネルを叩きながら鼻歌して作業をしている女性がいた。

ウサギ耳のを付けており不思議な国に出て来そうなエプロンドレスを見に纏う。

彼女は大きな「過ち」を犯した。

それはこの世界が女尊男卑になった原因でもある。

その原因は彼女、篠ノ之　束が開発したインフィニット・ストラトス「ＩＳ」なのだ。

宇宙に進出を目的としたパワードスーツの筈だった。

だがそれは「兵器」へと変わってしまった。

その所為で束は大切な友をひとり失くしたのである。

束はそんな自分が許せずＩＳに内蔵されている「コア」の製造をストップした。

大切な友、一夏の為に、そして償いの為に。

するとラボに二人の少年が二人がかりで１メートルほど長い荷物を持ち束の所にやって来た。

ひとりは髪の毛が赤くロングヘアでバンダナを付けている。

もうひとりは亡き一夏の弟であり緑の瞳以外顔が瓜二つであった。

束「あっ！はっくん（晴人）！だっくん（弾）！」
束は作業をやめ二人に体を向けた。
晴人「束さん、頼まれた物持って来ましたよ。」
晴人と弾は荷物を束の方に持って行った。
束「二人ともいつもありがとー！」
弾「いえいえ、俺たちはここで暮らしている分束さんのお手伝いは当たり前ですよ。なっ晴人。」
晴人「ああ。」
この二人は見捨てられたのだ。
一年半前、晴人はあの時、一夏の庇いで工場から逃げ切れた。
だがその後、晴人はひとり無残になってしまった瓦礫の工場の中で一夏を探していた。
一夏は見つからなかった。
見つかったのは一夏らしき右腕だった。
晴人は地面に膝をつけ涙を流し大声で叫び狂い始めた。
そこでやって来たのが束だった。
束は晴人と一夏が誘拐された事を日本政府の情報機関からハッキングして知った。

「きっとちーちゃんが助けに来てくれる。」と束は親友であり晴人と一夏の姉、織斑千冬を信じた。
だがそれは大きく覆した。
千冬は助けに来ず大会に出たのだ。
彼女は弟たちより名誉を大切にしたのだ。
信じられなかった束は急いで人参ロケットで晴人たちが囚われている工場へと駆けつけて来た。
晴人を見つけた時、彼の表情は死んでいたのだ。
涙を流し無の表情でヨロヨロと瓦礫と化した工場を立ち去ろうとしていた。
束は晴人を止め抱きしめた。
「いっくん何処にいるの?」と晴人に問いた。
晴人は何も反応しなかった。
すると束は晴人が両手で抱きかかえている右腕を見つけた。
束は「それ…て…」と震えた声で晴人に視線を戻すと晴人はゆっくりと頷いた。
この右腕が一夏のものだと分かった。
束は涙を流しもう一度晴人を抱きしめた。
「ごめんね…ごめんねはっくん…ごめんね…」と束は晴人を抱きしめながら謝り続けた。

それを聞いた晴人は泣き始めた。
束の中で。
晴人はもう何処にも居場所がなかった。
そこで束は晴人を保護しラボという居場所を作った。
一方の弾は一夏と晴人の親友だった。
何故、弾が束のところに居るのかと言うと、晴人たちが誘拐された二ヶ月後に女尊男卑に風潮された妹の蘭が祖父の厳に頼み家を追い出されたのだ。
そこで街をふらふらしている弾は晴人と遭遇し束に引き取って貰ったのだ。
そして二人は女尊男卑に毒されて政府の人間たちの差し金で世の中では死んだ事になっている。
二人の戸籍を抹消しようとした束は手間が省けてラッキーだった。
こうして二人は束と三人でラボで暮らしているのだ。
束「じゃあそれー適当に置いといて。」
晴人と弾は荷物を壁の隅に置いた。
するとその時ラボ中にアラートが鳴り始めた。
弾「なっ!?なんだ!?」
晴人「何が起こってるんだ!?」

二人はこのアラートを聞くのは初めてだった。
束「こっ……このアラート……まさか!?」
ウサギ耳をパタパタさせる束。
急いでキーボードパネルを操作しモニターを切り替えた。
束が打ち上げた人工衛星「ウサミ」を起動した。
この人工衛星ウサミは束の特定された人を見つける優れた衛星。
一年半前の誘拐事件で一夏と晴人が囚われている場所を見つけたのだ。
その後ウサミはもう二度と使う事がないと思い束は特定の人物を一夏と晴人にしたまま放置した。
だがウサミが特定の人間をとらえたのだ。
束「まさか……そんなまさか!?」
死んだはずの人間がいる訳がない。
束は驚愕しながらキーボードパネルを打つ。
晴人「ど、どうしたんですか？束さん。」
晴人と弾は束の近くに寄った。
モニターに映し出されたのは地球だった。
少しずつ小縮されある島へと近づいた。

そこは熱帯雨林とジャングルで覆い尽くされた小さな島だった。
その島は今は夜。
束は浜辺に何か明るい光を見つけた。
誰かが焚き火をしている。
キーボードパネルを打ちそこをさらに小縮した。
すると信じられない人物が映った。
晴人の兄であり弾の親友でもある。
そして束の大切な友。
一夏だった。

木の枝を沢山集めた一夏は浜辺に戻って来た。
木の枝をルシファーの脚部を置いた。
途中帰りに、川を見つけた。

一夏は食料を確保する為川に向かった。
川に着きパイロットスーツの上半身だけを脱ぐ。
一年前の右腕は鉄で出来た義手だったが今は対人用の義手になっていた。
本物の腕に見せるようにシリコンで人と同じ皮膚の色や感触を再現されており手首の中にブレード（手刀）が収納されている。
他にも銃の形を作ると衝撃弾や炎弾、プラズマ弾が撃てる。
そして戦車の砲弾を受け止める耐久性を施しているが衝撃が強くて一般の市民には大抵無理だろう。
一夏「プラズマで魚を麻痺させるか。」
一夏は右腕の義手で銃の形を作りプラズマ弾をチャージする。
一夏「そう言えばプラズマ弾を放つのは初めてだ……なっ！。」
そう呟いて川に向けプラズマ弾を放った。
川に放ったプラズマ弾は着弾したところに2メートルを超える水柱を立てた。
水面に無数のスパークは飛び散り一瞬で消えた。
一夏「こいつが一番衝撃が強いな。さてと魚は……」
一夏は川の水面にプラズマ弾で麻痺している魚を探した。
すると数秒後、麻痺した魚たちがプカプカと浮き始めた。

一夏「見つけた。」
再びパイロットスーツを着て川の中に入り魚を5匹をゲットし今日の食料を確保した。
空はいつの間にか黄金色に染まっていた。
一夏「もう日が沈む……戻ろう…」
両手で5匹の魚を抱きかかえるように一夏は浜辺に戻った。
魚は一度ルシファーから1メートル離れたところに置きルシファーの脚部に置いといた木の枝を魚の近くに置き一本ずつ円になるように枝を置いた。
余った枝は魚に串刺しにして魚の塩焼きにしたり火が良くなった時に使える。
そうして一夏はサバイバルグッズのライターで円に並べた木の枝に火をつけた。
そして砂で汚れてしまった5匹の魚を海で洗い内蔵を取り出し余った木の枝で串刺しにして
火の周りに置いた。
そうやっている内にすっかり日が暮れ夜になった。
千以上の星が空で輝いている。
背中を地面につけて星を見つめた。
一夏「オズマ隊長……艦長……ルカ……アルト……」

一夏はＳＭＳのみんなの事を心配した。
バジュラとの最終決戦で突然穴に吸い込まれ気付けばこの星に飛ばされた。
一刻も早く戦線に戻らなければならない。
だがどうやって戦線に戻れば良いのか分からない。
この星は何処の星なのかも分からない。
フロンティア船団も他の船団の反応がない。
一夏「今考えても無駄か……」
一夏は起き上がり焚き火の火に通した魚を一本手に取りひとくち食べた。
一夏「……美味い。」
天然の魚をあっという間に食べその後、黙々と残りの４匹の魚を食べた。
そして銃を近くに寄せ体を横にし、海の波の音と潮風の香りを体いっぱいに吸い込み、眼を閉じた。
こうして１日が終わった。

筈だった。

穏やかな眠りにつくいい具合のところだった。
だが深い眠りにつく一夏の聴覚が刺激された。
刺激したのは音でありその音は風を斬り裂く砲弾の音に近かった。
その音に刺激された聴覚は眠っていた脳に伝わり危険を察知した脳は覚醒し一夏を目覚めさせた。
目覚めた一夏は銃の手にし人間とは思えない速さで起き上がり音がする空の方へと銃を構えた。
すると真上にある物体が此方に近づいて来た。
最初はミサイルかロケットかと思った。
だが此方に近づいていく内にある形に見えて来た。
それは
一夏「ニン……ジン…?」
人参だった。
人参と同じ色に塗装されておりもはや人参そのものだった。
人参は更にスピードを上げ一夏の方へと向かって落ち行く。

一夏は軍式の人工肉体になった体でルシファーの方へと下がった。
人参は元いた一夏の手前で地面に突き刺さり爆炎のように砂煙が舞った。
砂煙が晴れ視界がはっきりと見えた時、人参が真っ二つに割れた。
危険を察知した一夏は銃を構えて警戒した。
そして真っ二つに割れた人参から人影見え徐々に姿を見せた。
不思議な国のようなエプロンドレスを着てウサギ耳のカチューシャを付けている女性だった。
彼女は一夏を見つけ目が合った。
一夏は警戒心を解かなかった。
一夏「誰だ！」
すると彼女は笑顔で目に涙を浮かべ
???「いっくん……私だよ……束さんだよ？」
と震えた声で伝えた。
一夏「た…ばね…ッ!?」
その時、一夏の頭の中で「束」と言う人物を思い出した。
それは元居た世界の知り合いの名前だった。
一年半前、元居た世界の記憶を思い出す。

ＩＳというアーマードスーツが原因で世界が女尊男卑へと変わった世界。
そして目の前に現れている彼女がＩＳの産みの親「篠ノ之　束」だった。
一夏「…た……束…さん…」
元居た世界の事を思い出した一夏は自然に警戒心を解き銃を構えるのを止め唖然と束を見つめた。
途切れた声だったが束は一夏の声がはっきりと聞こえた。
感情を抑え切れなかった束は一夏の方へと走り出した。
束「いっくーん！」
そして力いっぱい一夏を抱きしめ子供のように泣いた。
その時、一夏はやっと気付いた。
ここは元居た世界だと。

再会

泣き止んだ束は呼吸を整えて一夏と一緒に浜辺に座った。
束「ごめんねいっくん、重かったでしょ？」
一夏「いえいえ大丈夫ですよ束さん。」
束はニコリと笑った。
そして束は本題に入った。
今まで何処に行っていたのか。
どうして右腕があるのか。
束「ねぇいっくん、今までいっくんは何処に行ってたの？」
一瞬一夏は困った顔をしたが「束さんなら大丈夫。」だと思い口を開き、転移した事、フロンティア船団の事、右腕の義手と自分の体の筋肉と骨格の事、ＳＭＳと言う民間軍事会社に入った事、バジュラと言う地球外生命体と戦った事、バジュラとの最終決戦の途中に黒い穴に吸い込まれ元居た世界に来た事、向こうの世界で過ごした事全て話した。

真剣に聞いた束は一夏が言っている事を信じた。
束「へぇ～そうだったんだー。しかしまさかとは思ってたけど本当に異世界があるんだー束さんチョービックリ！ところでさーいっくん。」
一夏「はい？」
すると束はある方向に指をさした。
束「アレなぁに？」
束が指さした方向。
それはガウォーク形態のルシファーだった。
一夏「あー、これは『バルキリー』と言って三段変形が出来る可変戦闘機で宇宙、空、水中、飛行可能で三段階変形のひとつバトロイド形態だと地面を歩く事もできます。」
その事を聞いて束は驚いた。
束「えぇぇぇ!?ウッソー!?」
一夏「俺のバルキリー名は『ＶＦ―２７ルシファー』。サイボーグ専用機で普通のバルキリーとは違って高機動性能で速いんですよ。」
次の瞬間。
束「いっくん！」
顔を一夏に近づけウサギ耳をパタパタとさせる束。

彼女の目はキラキラと光っている。
一夏はいきなり束の顔が近づいて驚いた。
一夏「な…何ですか!?」
束「乗せて！」
一夏「べ…別にいいですよ…」
束は「やったー！」とガッツポーズしてジャンプした。

ヘルメットをかぶり一夏は束をルシファーのコックピットの後部座席に乗せて全システムを起動してエンジンをスタートさせた。
計器をチェックして操縦桿を握る。
脚部のブースターを噴射しルシファーが浮上する。
束は「おー！」と感動していた。
そして高度が２５メートルになり一夏はガウォークからファイターに変形させる事を束に伝えるべく後部座席の方を振り向いた。
一夏「束さん、今から一般戦闘機と同じ飛行の『ファイター形態』に変形します。少し揺れますよ。」

束「ＯＫ～！」

束は笑顔で承知した。
まるで子供のような束を見て一夏は小さく笑い前を向いた。
そしてガウォークからファイターに変形して飛翔した。

ルシファーは急降下したり急上昇したりと飛んでいた。
後部座席に座っている束ははしゃいでいた。
そして海面すれすれに飛行して潜水した。
束「ウッハァー！すごい！束さんチョービックリ！」
一夏「フッ、そうですか。」
しばらく一夏は水中で潜水した。
そして一夏は束にある事を聞いた。
一夏「束さん……」
束「なに～？いっくん。」

晴人は……あの後どうなったんですか？

束「……」

あの後、誘拐事件の時。

さっきまで子供のようにはしゃいでた束はまるで別人のように表情が変わり複雑な気持ちになった。

しかし一夏に言わなければならない。

言わないといけない。

束は複雑な気持ちを押しきって口を開き落ち着いた声で言葉を発した。

束「いっくんが庇った後、はっくんはあの工場に戻っていっくんを探してたんだよ。」

一夏「……」

束「そこにこの私、束さんが駆けつけ、はっくんを保護したんだよ。その後はっくんは束さんのところで暮らしているよ。」

一夏「そうですか……束さん、晴人を助けてくれて有難うございます。そしてすいません、晴人の面倒を見てくれて……」

束「そんなのいいよいっくん。悪いのちーちゃんだよ。」
一夏は「ちーちゃん」即ち「織斑千冬」の言葉を聞いて操縦桿を強く握る。
憎い。
許せない。
弟よりも自分の名誉を守った千冬を一夏は憎む。
晴人も同じだろう。
すると束は話を変えた。
束「ねぇいっくん。いっくん今住むところないでしょう？」
一夏「まぁそうですね。」
束「じゃーさー！束さんのところに来ない？」
一夏「え？」
束「だって今のいっくん危ない立場なんだよ？このバルキリーとか言うものを持ってるし、しかもいっくんは世の中では死んでいるんだよ!?」
束が言う事は確かだった。
元居た世界、つまりこの世界と向こうの世界の年は同じだが、科学の進歩は向こうの世界がダントツである。
この世界の科学者にとってルシファーはパンドラの箱とも言えるだろう。

そして世界に一夏が生きていると知ったら大騒ぎになり命の危険が多い。
それに織斑千冬も黙ってはいないだろう。
一夏は少し考えた。
一夏（束さんはいい人だ。けどこれ以上迷惑かけたら……でも晴人は俺の事を心配してるかも知れない。ここは束さんの言葉に甘えよう。）
一夏「じゃあ……お言葉に甘えて……お願いします。」
束「決まりだね！それじゃー早速束さんのお家（ラボ）へレッツゴー☆」
と束は言い拳を上にあげた。
一夏「え!?でも束さんのあの人参のロケットはどうするんですか？」
束「あーアレ？アレは使い捨てバージョンだから大丈夫だよ。」
すると束はポケットの中から小さなボタン装置のボタンをポチッと押した。
その頃、一夏と束がいたあの小さな島が人参ロケットの爆発によって半分無くなった事は別の話だった。
束「それじゃー改めてレッツゴー☆」
一夏「了解。」
一夏はルシファーを水中から一気に空へと上昇し、指示されたところに飛翔した。

あれから3時間飛行し日本領空内に入った。
どうやらあの小さな島は南大西洋に浮かぶ島らしい。
この世界の一番速い乗り物でも6時間以上かかるが、このルシファーは3、４時間で南大西洋から日本に行ける。
一夏「束さん。」
ルシファーを操縦している一夏は後部座席に座っている束の方を振り向けず、一夏は前を見ながら束を呼んだ。
束「ナニいっくん？」
一夏「ＩＳ開発やっているんですか？」
束は一瞬顔を曇らせたがまたいつものテンションで言葉を放った。
束「そりゃー勿論、束さんはＩＳの産みの親だもん。親は最後まで子供（ＩＳ）の面倒はちゃんとしなきゃいけないんだよー。」
もしＩＳがなければ普通に暮らせたのだろうか？
周りから「織斑千冬の付属品」「出来損ない」と言われずに済んだのだろうか？
その言葉を聞いて色々複雑な気持ちになる一夏。
だがＩＳが誕生しなければ沢山（向こうの世界）の人達に会えなかったかも知れない。
束だってＩＳを兵器にしたくなかったと思っている筈。

すると束は一夏にある事を言った。
束「あっ！そうそう！束さんはね今ＩＳを宇宙で自由に飛び回る研究をしているんだよ！」
一夏「宇宙と男性ですか。」
束「うん！本来ＩＳは兵器じゃなくて宇宙に行くものなんだよ。イヤーいっくんが異世界に居た話を聞いて束さん興奮ＭＡＸだよー。」
一夏「そうですか……束さん、そろそろ目的地周辺です。指示をお願いします。」
束「オッケー、左に見える小さい島見えるよね？」
一夏は左を向いて小さい島を確認した。
一夏「はい見えます。」
束「じゃあその付近に近づいて。」
一夏「わかりました。」
束の指示を聞いてルシファーを島に寄せ、島の真上でガウォークに変形し空中で停止した。
すると束はポケットの中からケータイを取り出し誰かに電話を掛けた。
束「もしもしクーちゃん？……あーそれに乗ってるの束さんといっくんだよ……うん！それじゃーお願いねー」

その時だった。
突然島にノイズが掛かる現象が起きた。
島が少しずつノイズの所為で消えてゆく。
一夏は驚いたが直ぐに立体映像だと気付いた。
そして立体映像で映し出された島は消え正体を現した。
それは空母と研究所のような建物が合体したものだった。
束に聞いてみると空母と研究施設を合体させた潜水可能の移動式研究所だと言う。
「滑走路に着陸して。」と束が言い一夏はルシファーをガウォーク形態のまま滑走路に着陸した。
すると一瞬、ガタンッ！と揺れ滑走路がエレベーターのように下がり始めた。
そして滑走路が下がっていく内に元の高さだった滑走路のところが両サイドから現れるハッチが閉められ空の光を閉ざし視界が真っ暗になった。
だが直ぐに灯りがついた。
一夏はヘルメットを外しコックピットのハッチを開けた。
後部座席に座っていた束がコックピットから降りて一夏に向け両手を広げ
束「ようこそ！我が家『ラビットハウス』へ！」
と言いニコリと笑った。

すると束の後ろから二人の少年が現れた。
晴人と弾だった。
晴人「……兄…さん？…本当に兄さんなの？」
震えた声で言葉を発する晴人。
一夏「そうだ俺だ晴人……大きくなったな…」
一夏はコックピットから降りて笑う。
晴人は「兄さん……」と呟いて目に涙を浮かばせ一歩ずつ一夏に近づいて左腕を握り顔を近づけて涙を零した。
晴人「…本当に兄さんだ……生きてたんだね……兄さん……」
肩を震わせている晴人を一夏は義手の右腕で抱きしめた。
一夏「ごめんな晴人、心配させて。」
久しぶりに弟と感動の再会を果たした一夏は兄として微笑んだ。
束も弾も涙を浮かばせている。
すると一夏はある事に気付いた。
何故ここに弾が居るのかと。
だが今は弟の晴人の再会を楽しむ事にした。

弾とクロエ

それから5分が経ち束たちに連れられ会議室に居た。
一夏は何故弾がここに居るのかと束に聞いた。
すると束ではなく弾本人が答えた。
「お前と同じように家族に捨てられた。」と。
一夏「そうか……辛い思いをしたんだな弾…」
悲しげにそう伝える一夏。
それに対して弾は少し笑った。
弾「別にどうってことないぜ一夏。今の俺はあの家（五反田家）の人たちを家族とは思ってないからな。」
一夏「フッそうだな。」
一夏も同じだった。
だがかつて姉だと思っていた者は今は赤の他人である。
晴人「ねぇ兄さん。そろそろ教えてくれないか？今までどこ行ってたの？あの乗り物

は何なの？」
一夏「そうだったな。」
一夏は晴人と弾に全てを話した。
晴人と弾は一夏の話を聞いて驚いた。
最初は信じられなかった。
だが、一夏が着ているパイロットスーツやバルキリーのルシファーがこの世界のものではない事で二人は信じた。
一夏「だがこの世界に来たのは俺だけじゃないんだ。」
束「いっくんだけじゃない？それどうゆう事？」
さっきまで黙ってた束は一夏の放った言葉に首を傾げて一夏に聞く。
一夏「つまり俺を追撃しに追って来たＶ９、簡単に言えば高機動のドローンだ。そいつらが穴の吸引力で吸い込まれこの世界に入り込んだってワケ。」
弾「で、でもよ一夏、そのＶ９って言うドローンたちはお前を殺すようにプログラムされているんだよな？」
一夏「ああ。」
弾「だったらよ？一夏、Ｖ９の燃料が尽きるまで隠れとけばいいじゃねぇか。」

だが弾の提案は直ぐに撤回された。
一夏「いいやＶ９は最低でも二、三週間は保つ。追撃対象が俺でも味方じゃない奴は容赦なく撃ち落とす、民間人が乗っている旅客機でもな。」
束たちは驚きの余り大きく目を見開く。
一夏は言葉を続けた。
一夏「例え奇跡的に何もなくＶ９が停止しても機体の中に確認されていない生命体に人類の文化や技術が入ったカルチャーメモリーが入っている。もちろん俺のルシファーにも入っている。だがそれがテロ組織や政府が回収したらどうなると思う？」
晴人「世界が崩壊する……」
束「世界の軍事バランスが崩壊、テロ組織の場合だとテロ行為が増える。」
一夏「その通りだ。しかもＶ９一機で軽々と都市ひとつは陥落させる力を持っている。ＩＳで立ち向かっても簡単に落ちるだろう。」
一夏の話を聞いて束たちは何とも言えなかった。
一夏「俺はあの殺人機を止めないといけないんだ。例え一人でもな。」
その時だった。
???「失礼します、束様。」
重い空気にみまわされた会議室にメイド服に近い黒のロングエプロンを着た銀髪の

少女がお辞儀をして中に入ってきた。
束「あっ、クーちゃん！」
???「束様、ラビットハウスのカバー完了しました。後は束様の指示でラビットハウスを潜水させます。」
束「ありがとう～クーちゃん！後でいい子いい子してあげるね！」
少女は「いえいえ。」と笑顔で言った。
すると少女は一夏に気付き近づいた。
クロエ「初めまして一夏様、私の名前はクロエ・クロニクル。クロエと呼んで下さい。」
少女は笑顔で自己紹介してお辞儀をした。
一夏はどうして彼女が自分の名前を知っているのか気になり問いた。
一夏「どうして俺の名前を知っているんだ？」
クロエ「前から晴人さんと弾さん、束様から聞いていました。」
一夏「そうか、じゃあよろしくなクロエ。後、俺の事は様付けはやめてくれせめてさん付けで頼む。」
クロエ「わかりました、一夏さん。」
束「あっ！そうだそうだ！クーちゃん、後でいっくんの部屋とラビットハウスの中案内してくれる？」

クロエは束の方に体を向け「わかりました。」と言いながらコクリと頷いた。
すると晴人が何か思い出したのかクロエに尋ねた。
晴人「クロエちゃん、今日分のご飯の食材ってある？」
クロエ「いいえ、丁度昨日で終わりました。後で買いに行きましょうか？」
晴人「いいよクロエちゃん、僕と弾が買い出しに行くから。いいですよね束さん？」
束は「いいよ！」と言い「何で俺も!?」と弾は晴人の勝手に突っ込んだ。
この光景にクロエと一夏は小さく笑った。
その後、一夏はクロエの案内でラビットハウスの艦内を回り束が用意してくれた部屋に向かっていた。
するとクロエが一夏と廊下を歩きながら呟いた。
クロエ「信じられません。」
一夏「何が？」
クロエ「パラレルワールド（異世界）が本当に存在している事ですよ。」
一夏「聞いてたのか？」
クロエ「丁度一夏さんが喋っていたので入るのも邪魔かと思い喋り終わるまで待ってました。」
一夏「それは待たせてすまないなクロエ。」

クロエ「いえいえ、滅多にないお話でしたのでいいですよ。」
「そもそも盗み聞きした私が悪いのですから。」と付け足すクロエ。
そうしている内に一夏の部屋に着いた。
クロエ「着きました、ここが一夏さんのお部屋です。」
ドアノブを持ってドアを開けるクロエ。
一夏は部屋の中へと入った。
部屋は改装され一般的家の部屋ようだった。
色々な家具が備わっていてトイレとシャワールーム、洗面所も付いていた。
一夏「随分と改装されているんだな。」
と呟きながら一夏は辺りを見回す。
クロエ「ここは元々艦長の部屋だった部屋です。電気のスイッチやコンセント全て一般家庭の物ですから心配は要りません。衣服はタンスとクローゼットの中にありますので。あとこの部屋のキーです。」
クロエは一夏に部屋のキーを渡した。
一夏「ありがとうクロエ。」
クロエ「いえいえ、では私はこれで。何かありましたら廊下を出て左に直ぐに電話機がありますので何時でもかけてください。では失礼します。」

クロエは一夏に頭を下げお辞儀し部屋から出た。
ひとりになった一夏は少し立ったままボーとしていた。
そして
一夏「シャワーでも浴びるか……」
と呟きタンスからバスタオルを持ってパイロットスーツのままシャワールームに入った。

決意

一夏「ふぅ～」

シャワーを終えタオルを腰に巻きパイロットスーツを片手に持ってシャワールームから出た一夏はクローゼットを開きパイロットスーツをハンガーに掛けて中に入れて閉じた。

そしてタンスから衣服を取り出して着替え始めた。

黒い半ズボンに一枚のTシャツと言う単純な格好で部屋を後にしてルシファーが置いてある滑走路の方へ向いルシファーのコックピット座席に座りモニターに電源を入れた。

モニター画面にタップし機体に搭載されているカルチャーメモリーに接続した。

カルチャーメモリーに接続した一夏は「ファイヤーボンバー」と日本語で書かれたファイルを開き「突撃ラブハート」をタップした。

するとコックピットから音楽が流れ始めた。

ギター、ドラム、ベース、キーボード、の音が絡み合い激しく響き渡る。

そしてギターとボーカルを担当している「熱気バサラ」の歌が響く。

『Ｌｅｔ，ｓ　ｇｏ　突き抜けようぜ
夢に見た夜明けへ
まだまだ遠いけど　～』
一夏は目を閉じて後ろにもたれ歌を聞きながら口ずさむ。
弾「いい歌だな。」
下の方から弾の声が聞こえた。
体を起こし一夏は下の方に顔を向けた。
当然弾がいた。
一夏「ん？弾、どうした？」
弾「いや、聞いた事も歌が此処から聞こえてきたから来たんだよ。」
弾は音楽が大がつくほど好きで独学でドラムをやっていた程だった。
一夏「そっか、いい歌だろ？」
弾「ああ、ハートにビンビン来るぜ！一体誰の歌なんだ？」
一夏「熱気バサラ、ファイヤーボンバーって言うバンドチームでボーカルとギターを担当してる。」
弾「へぇ～」
一夏「でもこの歌、十四年前の曲だぜ。」

弾「十四年前って、お前どこで知ったんだよソレ……」
一夏「俺が所属していた小隊の隊長（オズマ隊長）が勧めてきたんだ。それからこの曲にハマってみんなでバンドとかやってたな。昔ファイヤーボンバーは流行ってたらしいが今はもう伝説のバンドになって幻化している。今は銀河の妖精と呼ばれるシェリルとランカぐらいだな。」
弾「伝説のバンドねぇ、つーかお前向こうでバンドやってたのかよ。」
一夏「まぁな、バサラと同じギターとボーカルを担当してたぜ。」
バンドのリーダーだったオズマは「バンドと言えばファイヤーボンバーだ！」と言いファイヤーボンバーの曲しかやらなかった。
一夏は弾が独学でドラムをやっていた事を思い出し今でもやっているのかと聞いた。
一夏「そう言えばお前、まだドラムやってんのか？」
弾「ああ、やってるぜ！晴人の奴もベースとかやってるぜ。」
一夏「へぇ～、晴人の奴がねぇ。」
すると弾は何かいい事を考えたのか一夏にある提案をした。
弾「なぁ一夏、俺と晴人でバンド組まないか？」
一夏「別にいいけどバンドって言っても、最低でも四人は必要だぞ。あとひとりはどうすんだよ。」

弾「まぁそこは束さんかクロエちゃんで埋めるから心配するな。」
と言う弾だがこの後、束とクロエに断られた。

翌日の朝
自分の部屋の洗面所の鏡の前で歯を磨いていた一夏。
トントン
玄関からノックする音が聞こえた。
一夏「ん？」
洗面所から顔を出し玄関を見る。
すると玄関の向こうから声が聞こえた。
クロエ「おはようございます一夏さん。」
声の正体はクロエだった。
一夏「あーちょっと待ってくれ今開ける。」
歯ブラシを口にくわえたまま一夏は玄関に向かいドアを開ける。
玄関を前にはクロエがいて「おはようございます一夏さん。」と言いお辞儀をして要件を一夏に伝えた。
クロエ「朝早くすいません、どうしてもお伝えしたい事があって来ました。束様が1

０：３０にラボに来て欲しいとの事です。」
一夏「俺も丁度束さんに用があったんだ、わかった。連絡ありがとうクロエ。」
クロエ「では私はこれで失礼します。」
もう一度一夏にお辞儀をしてこの場を去った。

１０：３０
一夏は束のラボの前に立ち止まりドアの横壁に埋め込まれているパネル式のインターホンを鳴らした。
一夏「俺です束さん。」
束『ハイハイいっく～ん、中に入ってー』
一夏はドアを開けて薄暗いラボの中へと入った。
ラボの奥に無数のモニター越し座りキーボードパネルで操作する束。
一旦手を止めくるりとイスを後ろにいる一夏の方に向けた。
束「やーやーいっくん、待ってたよ。実はお願いがあって呼んだんだ。」
一夏「それは奇遇ですね。俺もですよ束さん。」
束「じゃー先にいっくんから要件を言っていいよ。」
一夏「昨日、調べたんです。今の世界の状況を。」

昨日、弾と別れた後クロエにパソコンを借りて世界の状況を調べた。
世界の状況は余りにも酷かった。
つまり女尊男卑の威力が大きくなり強くなっていたのだ。
日本を合わせてこの世界の国の７割は女尊男卑が当たり前になり日本の政府の人間はほぼ女尊男卑に毒された女性だった。
インターネットの裏サイトの動画でもわかった。
それはアメリカの女性警察官が何もしていない五人の男性を所持していた銃で発砲している動画だった。
その後、五人の内二人が死亡したと字幕に書かれてた。
他の動画ではチェコスロバキアの都市では男性による女尊男卑反対のデモが起きていた。
すると治安維持ＩＳ部隊が武力による鎮圧が始まったのだ。
そして一番酷かったのは日本だった。
あるニュースサイトではある記事が掲載されていた。
それは「女尊男卑団体ＩＳ集団、〇〇〇男子高校へ侵入し男子生徒３７０人を理由もなく殺害。」と書かれた記事だった。
近年日本では女尊男卑団体による事件が多発している。

これを見た一夏は頭の額に手を当てこう思った。
この世界は更に酷くなった、と。
一夏「女尊男卑の力が前より遥かに大きくなり世界中で事件やデモが起きている。その所為で毒された人たちによって関係ない人たちの命が奪われ死んでいく。」
拳を強く握りしめ更に言葉を続ける。
一夏「だから俺はこのイカれた世界に『ＳＭＳ』と言う男女平等なＰＭＣ（民間軍事会社）を立ち上げ世界を戻す。その為に束さんの協力が欲しいんです。」
一夏の言葉を聞いた束は子供のような表情から真剣な表情に変わった。
束「つまりいっくんは元の世界に戻したいんだよね？私はいっくんの為なら協力するよ。束さんは具体的に何すればいいのかな？」
すると一夏はズボンのポケット中からＵＳＢメモリーを取り出し束に見せた。
一夏「これはカルチャーメモリーに入ってるＶＦ―２５、Ｆ、Ｓ、Ｇ、の設計図をコピーしたＵＳＢメモリーです。これでバルキリーを作って欲しいんです。」
束「つまり束さんは整備担当って言う事だね、いいよ、天災と呼ばれたこの束に任せなさい！」
と言いながら椅子から立ち上がり束は仁王立ちで胸を張る。
一夏「他にも頼む事がいっぱいあるのですが今はそっちの方が最優先ですので。」

束「いいよいいよいっくん、束さんは何でも出来る天災だから安心しない！」
「ありがとうございます。」と一夏は束に御礼しＵＳＢメモリーを渡した。
束「じゃあ次は私の番だね。」
束は指をパチッと鳴らした。
すると一夏の横にＩＳ「ラファール・リヴァイヴ」が無人のまま現れた。
束「さぁーいっくん、どの部分でもいいからそのＩＳに手を当ててみて。」
一夏は束の言う通りリヴァイヴの腕に手を当てた。
一夏「…こう……ですか？」
するとリヴァイヴが光り始めた。
一夏「ッ!?」
光は徐々に大きくなり一夏を包みこみ強い光を放ち光が消えた。
そして
一夏「さっきの光はな……ッ!?」
気付けば一夏はリヴァイヴを纏っていた。
ＩＳを纏っている事に驚く一夏。
だが、対してＩＳの親（開発者）である束は普通の表情だった。
束「やっぱりいっくん、ＩＳを動かせるんだね。」

一夏「俺が…ＩＳを?」
驚きながらも正気な一夏。
束「うん、そーだよ。原因はわからないけど。まさかいっくんもかぁ～」

今の束の言葉に「も」が付いてた事に気付いた一夏は疑問に思いそれを口に出した。
一夏「『も』って他にもいるって事ですよね?……ッ!ま…まさか!?」
弾「ああ、そのまさかだ。」
ラボのドアから弾と晴人が現れた。
そう、弾と晴人もＩＳを動かせたのだ。
二人は束の元へ足を運ぶ。
一夏「弾…晴人…でもどうして?」
晴人「躓いた時誤って打鉄に触れちゃってさ。」
と言いながら頭をかきながら照れる晴人。
弾「俺は束さんのラボの掃除しようとＩＳのコアを移動させようとしたらコアが反応した。」
と弾は平然と言う。
晴人と弾の話を聞いて「偶然じゃねーかよ!」と心の中で突っ込んだ。

一夏「あのー、そろそろコレ（ＩＳ）解除してくれません？」
初めてＩＳを纏った一夏は元に戻す方法がわからない。
束はもう一度指を鳴らしてＩＳを解除し本題に入った。
束「実はね、宇宙進出の研究の為にね、いっくんにＩＳを乗って自分の機動データと他のＩＳ乗りの機動データを取って欲しいんだー」
一夏「機動データの収集？だったら晴人や弾に任せればいいじゃないですか。俺はＩＳ何て操縦した事ないし。」
束「二人は一年前からＩＳの操縦出来るけどまだ専用機を作ってないんだよ。まーいっくんも専用機ないしＩＳに触れたばかり、けどいっくんの場合は戦闘経験豊富にあるし直ぐにＩＳに慣れるよ。しかも直ぐにいっくんたちの専用機作れるかもしれないし。」
一夏「専用機？」
束「そう！いっくんがここ（元の世界）に帰って来るまではっくんとだっくんの専用機を作ろうと機体のデザインを考えてたんだ。でね！いっくんが帰った時、束の頭の中でひらめいたんだよ！いっくんたちの専用機！」
頭にクエッションマークを浮かばせる一夏たち。
一体どんな専用機を作るのだろうか？と。

束「どんなＩＳを作るのか？って顔してるねぇ～まーそれはお楽しみだよ！て事でいっくん、いいかな？」
一瞬、困った表情するが了承した。
一夏「わかりました。」
束は拳を上げてウサギのように飛び跳ね喜ぶ。
束「やったー！それじゃあ早速いっくん頼まれた物と専用機の素材を　ー」
その時だった。
突然ドアが開いた。
束たちは視線をドアのに向けた。
ドアを開けたのは息を切らしたクロエだった。
クロエ「た、束様ッ！」

蒼きスナイパーの復活

束「ど、どうしたの!?クーちゃん!?」
束は早足でクロエの方に寄り心配した。
クロエは息を整えて束にある事を伝えた。
クロエ「『あの人』が目を覚ましました！」
「あの人」と言う言葉を耳にした束と晴人と弾は驚く。
一夏は「一体誰の事だろうか?」と思った。
束「ほ、本当に!?」
クロエ「はい、間違いありません。」
束「わ、わかった今行くから。みんな！行くよ！」
晴人と弾は「はい！」と言い束と共にラボを出た。
一夏はラボを出て行った束と晴人と弾を唖然していた。
一夏「……」
クロエ「一夏さん行きましょう。」
一夏「あ…ああ……」

クロエの後を追うように一夏もラボを出た。
一夏（一体誰だ「あの人」とは？）
だが一夏はこの時知らなかった。
束や晴人と弾そしてクロエも知らなかったが「あの人」と言う人物は向こうの世界の人だという事を。
そして死んだと言われた一夏の親友だと言う事を。

クロエの後を追うように付いて行く一夏。
そしてクロエは「病室1―1」と書かれてあるドアで立ち止まった。
束たちが先にいる為ドアが全開だった。
一夏「クロエ、聞きたい事があるんだが『あの人』って誰だ？」
クロエ「私たちも知りません、9日前突然ラボの中で血を流して倒れてたところを発見したんです。治療してなんとか一命を取り留めましたが今まで昏睡状態でした。」
一夏「突然束さんのラボで倒れてた……怪しいな…」
クロエ「私たちもそう思っています。見つけた時、あの人は壊れたＩＳなような物を纏ってました。ですがあの人を治療した後、束様はあの人が纏ってた物を調べました。

結果それはＩＳではない事が分かったのです。その写真がこれです。」
クロエはポケットから一枚の写真を一夏に見せた。
一夏はその写真に写っている物を見た。
一夏「ッ!?そ…それは⁉?」
目を疑った。
写真に写っている物は後腹部が貫かれ血痕が付着しているＥＸギアだった。
その時、一夏はルカにミハエルの最期を聞かされた事を思い出しこのＥＸギアがミハエルの物と分かった。
クロエ「一夏さん?」
急いで一夏は病室に入った。
束「いっくん⁉?」
晴人「兄さん⁉?」
弾「一夏⁉?」
束たちは突然一夏が慌てて病室に入って来た事に驚く。
一夏はベッドに体を預けている「あの人」の方に目を向けた。
「あの人」と目が合った。
震えた声であの人、いや、彼の愛称の名前で呼ぶ。

一夏「ミ…シェル？」
彼も呟く。
ミハエル「イチ…カ？」
彼が一夏の名前を口にした時、一夏は確信した。
彼はミハエル。
ミハエル・ブランだと。
ミハエル「イ…チカ……一夏なのか⁉？」
ミハエルは慌ててベッドから起き上がろうとする。
しかし腹部に激痛が走った。
ミハエル「グッ!?」
一夏「ミシェル！無理するな。」
一夏はミシェルの背中を支えながらゆっくりとベッドに寝かす。
ミハエル「俺は……バジュラの幼生と相打ちになって宇宙に放り出された筈……」
一夏「多分、お前は俺がいた世界に転移されたんだ。」
ミハエル「俺がいた世界？」
一夏はミハエルに説明した。
オズマしか言っていない自分の事も。

バジュラとの最終決戦の途中、突然ブラックホールのような穴に吸い込まれ元の世界に戻った事も。
ミハエルは黙って聞いた。
そして15分に渡る説明を終えた。
ミハエル「大体内容は分かった。俺はアイランドIで産まれムラたがるバジュラの幼生と相打ちになって宇宙に放り出され、転移し此処、ISと言うパワードスーツが存在する世界に居ると。」
一夏「ああそうだ、付け足すとISは女性しか動かせない、その所為で世界は女尊男卑となっている。」
ミハエル「女尊男卑ねぇ……」
束「あ…あの～」
一夏とミハエルは束の方を向く。
束と晴人、弾とクロエが苦笑いしていた。
晴人「感動の再会中だけど僕たちの事忘れてないかい？」
一夏「あっ、すまない。」
ミハエル「一夏、この人たちは？」
一夏は「俺の弟と親友だ。」とミハエルに伝えた。

ミハエルは一夏に弟がいる事に驚く。
一夏「みんな自己紹介しくれないか？」
すると真っ先に束が挙手した。
束「ハイハ～イ私からいいかな？」
一夏はコクリと頷いた。
束「ゴホン！えー私がＩＳを開発した産みの親、束だよ～★」
「苗字は『篠ノ之』だよ～」と付け加え束は自己紹介を終える。
晴人「僕は晴人、兄さん（一夏）の弟です、よろしく。」
弾「俺は弾って言うんだ、よろしくな！」
クロエ「私の名前はクロエ・クロニクル、束様の補佐をしております。以後お見知り置きを。」
クロエはお礼儀正しくお辞儀する。
一夏の弟と親友たちの自己紹介が終わり次はミハエルの自己紹介になった。
ミハエル「ミハエル・ブランだ。住んでいた世界ではイチカと同じＳＭＳスカル小隊に所属していた。『ミシェル』と呼んでくれ、よろしく頼む。」
束「此方こそよろしくみっくん。みっくんの事は話を聞いて大体わかったから、じゃー束さんはラボに戻るからあとはクーちゃんに任せるよ。」

クロエは「承知しました。」と言いながら束に体を向けてお辞儀をする。
「それじゃー」と束は病室を出た。
病室では患者のミハエル、一夏、晴人、弾、クロエ、の四人だけになった。
するとミハエルは一夏にある事を聞いた。
ミハエル「なぁ、一夏……」
一夏「どうした。」
ミハエル「……俺が居ない間……クランは……どうしたんだ？」
クラン・クラン
ゼントラーディーでミハエルの幼馴染である。
ＳＭＳのクァドラン・レアのパイロットでピクシー小隊の隊長を務めている。
バジュラの幼生がフロンティア船団を襲った時、相打ちを負ったミハエルは宇宙に放り出される直前にクランに「愛している。」と伝えた。
だがその言葉は酸素が宇宙に流出した音でかき消されてしまい途中までしか言えなかった。
ミハエルはクランの事が好きだった。
クランも同じだった。
だがお互い告白もままならないままだった。

一夏は応えた。
一夏「初めてクラン大尉を見た時はお前の死をルカから聞いた後だった。クラン大尉はお前のバルキリー（ＶＦ―２５Ｓ）のコックピットの中でお前のヘルメットを抱きしめてお前を名を言いがら泣いていた。」
ミハエルは目を閉じて上を向いた。
一夏は間を空けてまた言葉を発した。
一夏「それから少しずつ落ち着いてきた、お前のメガネをお守りにな。」
ミハエル「そうか……」
ミハエルはわかった。
クランも俺と同じ後悔があると。
もう少し前に伝えとけば良かった。
だがまたいつか会える。
きっと会える。
その時は、彼女に伝える。
自分の想いを。
目を開け元の目線に戻した。
ミハエル「サンキューな、一夏。」

一夏は「別にいいさ。」と応えた。
一方の晴人たちは無言だったがクロエが沈黙を破った。
クロエ「私、お茶をお持ちしてきます。」
クロエはそう言ってお茶を作りに病室を後にした。
すると弾が一夏に話しかけて来た。
弾「なぁ、一夏。」
一夏「ん？なんだ？」
弾「此処に来る途中東さんから聞いたんだよ。お前が会社立ち上げるって。」
その言葉に食らい付いたのは
ミハエル「一夏、お前会社立ち上げるのか？」
少し驚くミハエルだった。
弾の言葉からしてまだ内容は知ってないようだ。
すると晴人が弾の言葉に続くかのように言葉を発した。
晴人「一体どんな会社なの？兄さん。」
会社の事を話したほうがいいのか話さないほうがいいのか困る一夏。
だがミハエルにも少し関係する為、一夏は話す事に決めた。
「とりあえず座ろう、話はそれからだ。」と言い折り畳みのパイプ椅子を３つ取り出し座

る。

晴人と弾も座り一夏の方に目線をやる。

ミハエルも真剣な表情で一夏を見る。

そして一夏は言葉を放った。

一夏「俺はＰＭＣを立ち上げるんだ。」

晴人「ＰＭＣ？」

弾「何だよそれ？」

晴人と弾は首を傾げる。

一夏は説明しようと口を開けたがミハエルが説明した。

ミハエル「ＰＭＣとは『プライベートミリタリーカンパニー』の略語。日本語にすると『民間軍事会社』、ＶＩＰの護衛や戦争面の仕事などなんでもござれ、まぁ簡単に言えば傭兵みたいなもんだな。こっちから見るとＳＭＳみたいなもんだな。」

一夏「ミシェルの言う通りだ。立ち上げる理由は２つある。ひとつ目はこの女尊男卑な世界には大半男性の死亡率が俺がいた頃より高くなっている事。死因はＩＳ関連や女尊男卑に毒された者による無差別殺人だ。俺はそれを阻止する。そして２つ目は俺と一緒に吸い込まれたＶ９の処理だ、Ｖ９がテロ組織に手に渡ったらこの狂った世界は更に狂い始め世界は滅びる。俺はこの世界に迷い込んだＶ９を破壊しこの狂い果てた

世界を戻す為、『Ｓｔｒａｔｅｇｉｃ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｓｅｒｖｉｃｅｓ　』を建てる。」

ミハエル「『Ｓｔｒａｔｅｇｉｃ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｓｅｒｖｉｃｅｓ』ってお前、この世界にＳＭＳを作るのか!!?」

ミハエルは一夏の言葉に驚愕する。

対して一夏は「ああ。」と頷く。

ミハエル「一夏…まさかお前…バルキリーを…」

一夏「ああ、束さんにカルチャーメモリーに入っているＶＦ―２５シリーズの設計図をコピーして渡した。あの人は天災だから何でも作れるぞ。」

ミハエル「だがパイロットはどうするんだイチカ。」

一夏「パイロットは元航空自衛隊の男性パイロット。」

元航空自衛隊男性パイロット。

ＩＳの誕生、そして女尊男卑によってやむおえなく「パイロット」と「自衛隊」という職と夢を失くした男性たちの事。

今の航空自衛隊は女性だけであり戦闘機ではなくＩＳなのだ。

もちろん陸、海、どの自衛隊も女性だけであり全てＩＳなのだ。

そこで一夏はバルキリーのパイロットを元航空自衛隊の男性パイロットに決めたの

だ。

一夏「でも元空自だけじゃない、この世界で苦しんでいる人たちにバルキリーを託したい。」

それだけではない。

世界中の元戦闘パイロットたちそして空に憧れパイロットの夢を持つ者たち、これまでＩＳに苦しんで来た者たちの為に使って欲しい。

一夏「世界最強と呼ばれるパワードスーツ『ＩＳ』、本来は宇宙に行く為に作られた。だが今は兵器となり世界最強と呼ばれる。」

ミハエルたちは黙って一夏の言葉を聞く。

少し間を空け更に発する。

一夏「世界を戻すには束さんが研究しているＩＳ宇宙進出、それと男性がＩＳを操縦可能にする研究が必要だ。だから俺は宇宙進出の研究と男性がＩＳを操縦可能にする研究を取り入れたいと思う。世界を戻す方法はそれしかない。」

一夏は立ち上がり拳を強く握りしめこう言い放った。

一夏「俺は戦う。女尊男卑となった世界を元の世界に戻す。例えどんな事があろうと俺は戦い続ける。」
瞳は真っ直ぐだった。
晴人と弾は一夏の姿を見て見開く。
その姿は様々な戦争で生き抜いて来た戦士だった。
言葉に感動したのか晴人と弾は決意した。
晴人「兄さん、僕も戦うよ。」
弾「俺も戦うぜ、一夏。」
二人の言葉を聞いた一夏は二人の方に体を向ける。
一夏「いいのか？お前ら、死ぬかもしれないんだぞ。」
それに対し二人はクスクスと笑い晴人がこう言った。
「もう僕たちは死んでるよ。」と。
思わず一夏は一本取られたと笑う。
そして真剣な表情で一夏は二人に問いた。
一夏「俺たちは命を奪う事が仕事だ。何か失っても後戻りは出来ないぞ。」
晴人と弾は真剣な眼差しで一夏を見た。
弾「覚悟は出来ている。」

僕「僕もだよ、兄さん。」
二人の決意が本物だとわかった。
一夏「よし、わかった。ミシェル、お前はどうする。」
一夏はミハエルの方を向く。
ミハエルは笑い右手で銃の形を作り一夏に向けた。
ミハエル「そりゃフロンティア支社代表として日頃サボっていないか見てやるよッ！」
と言い銃の撃つ仕草をした。
こうして束含め晴人と弾、ミハエルたちは第一号のＳＭＳの社員となった。

ヴァラヒア

1週間が経った。
一夏は晴人と弾と共にＩＳを纏い太平洋の中央上空で模擬戦をしていた。
真下には浮上して立体映像で艦をカバーしているラビットハウス。
束は別の広いラボでバルキリー3機同時製造してい途中である。
クロエとミハエルは監視室で三人の模擬戦のデータを記録している。
三人共使用しているＩＳはラファール・リヴァイヴ。
晴人は連装ショットガンを弾に放ち攻撃する。
それに対し弾は急上昇し攻撃を避ける。
後を追う晴人は連装ショットガンを構え上にいる弾に狙いを定める。
弾は二丁のアサルトカノンを展開しえび反りの体制で追ってくる晴人にフルオートで連射する。
しまった、と目を見開く。
だがそれは一瞬の表情、晴人は歯を食いしばり回避し旋回する。

弾は止まりアサルトカノンで更に攻撃を仕掛ける。
晴人は避けながら弾との距離を詰める。
距離が短くなる程、弾のアサルトカノンの弾幕がより激しくなる。
連射ショットガンを収納して近接ブレードを取り出す晴人はアサルトカノンの弾丸を斬りまた更に追い詰める。
そして追い詰めた晴人は近接ブレードを振りかざす。

しかし、もう一人の少年によって止められて。
一発の重機関銃が晴人に命中する。
バランスを失い落ちていく晴人を見つめる弾は一瞬何が起きたのかわからなかったが、一瞬でわかった。
そして一夏の攻撃だと。
今度は別の方向から弾丸が弾目掛けて飛んできたが弾は避けハイパーセンサーで重機関銃を構えている一夏を見つけた。
アサルトカノンを一丁収納して最大出力で一夏の方へ向かいアサルトカノンで撃つ。

だが遠いのか命中率が低く弾丸が逸れて行く。
一夏はスコープに目を覗かせ照準を弾に合わせ引き金を引いた。
重機関銃から放たれた弾丸は弾の顔面目掛けて光の速さで飛んで来る。
驚きを隠せないまま弾はギリギリ避け攻撃を再開する。
重機関銃を収納して二丁のアサルトカノンを展開した一夏は弾に接近する。
ジグザグに飛びながら攻撃する。
そして弾とゼロ距離となり二丁のアサルトカノンを収納し右手に連装ショットガン、左手は近接ブレードを展開し弾のアサルトカノンを近接ブレードで破壊する。
弾は重機関銃を展開し一夏の腹部に向けた。
しかし遅かった。
この時点で一夏は連装ショットガンの銃口を弾の腹部に付け連射し吹き飛ばす。
一方の晴人はなんとかバランスを取り戻し海との衝突を回避し一夏の方へと上昇接近し近接ブレードで下から斬り掛かるがホバリングで回避された。
そのまま上昇する晴人に一夏はアサルトカノンを連射する。
二、三発命中しシールドエネルギーが削られる。
すると弾がいつの間にか重機関銃を構え一夏の背後に居る。
それに対し一夏は体の能力を使ってＩＳの機動性をアップし弾の重機関銃を近接ブ

レードで破壊し殴る。
弾も歯を食いしばり拳でやり返すが一夏は簡単に避ける。
それをハイパーセンサー見た晴人は二丁のアサルトカノンを展開し一夏と弾の方へ急降下しアサルトカノンを連射する。
その時だった。
弾の拳を避ける一夏はその拳の腕を掴み陸上のハンマー投げのように振り回して攻撃しながら急降下する晴人に向け投げ飛ばし衝突する。
更に攻撃を加えようと接近する。
しかし模擬戦闘の終わりを告げるアラームが鳴った。

ラビットハウスに戻り格納庫でＩＳを解除する一夏たち。
ＩＳは緑色のリストバンドへと変わる。
汗の所為でＩＳスーツが肌にへばり付く。
三人は脱ぎ、上半身裸になる。
体は細いが腹筋がくっきりと見え後ろ姿が美しく見える。
だが一夏は違った。
背中に大きな傷跡が残っている。

そして今や骨格や筋肉、一部の肌は天然ではなく軍式の人工物になり身体能力が強化され、
胸以外全身女性に近い。
最初変わり果てた一夏の姿を見た晴人と弾、そして束は驚愕し涙してしまった。
そんな一夏は汗を拭きたいとタオルを探す。
そこへ大きなバケットを持っているクロエと束に買ってもらったメガネを掛けているミハエルがやって来た。
クロエ「皆さんお疲れ様です。スポーツドリンクとタオルを持って来ました。」
バケットを床に置き中からスポーツドリンクとタオルを一夏たちに渡す。
一夏「すまないなクロエ。」
と一夏はクロエに礼を言い貰ったタオルで汗を拭く。
クロエは小さく微笑んだ。
ミハエル「それにしても一夏、お前1週間でＩＳ乗りこなせたな。」
1週間で一夏はＩＳを乗りこなせている。
それは代表操縦者より遥かに超えている。
「そんな事はない。」 と一夏は否定するが晴人と弾は一夏の言葉に否定する。
晴人「そんな事ないよ兄さん！だって一度も攻撃当たらなかったじゃん！」

弾「そうだぞ一夏！攻撃が正確だし！接近戦でも直ぐにやられるし！しかも後ろに近づいて攻撃を仕掛けようとすると物すげぇ反応力で跳ね返されるしよぉ！」
途中口調が強くなり文句へと変わる弾。
すると奥からドタバタと足音が聞こえ徐々に大きくなる。
そして
束「いっくぅぅぅぅん!!!」
奥の方からウサギ耳をパタパタさせながら束が両手を広げ人間とは思えない速さで一夏目掛けてやって来る。
束に抱きしめられる直前、一夏は束の右肩に左手に掛けてジャンプし背後に付いたが束はコケて顔からダイブし転んでしまった。
束「もぅ！ひどいよぉ～いっくん、愛情込もったハグをしようとしたのにぃ～」
起き上がり涙目で真っ赤な鼻の先端を両手で撫で文句言う束。
一夏「束さんは愛情込もったハグではなく、愛情込もった殺人タックルですよ。でっ？どうしたんですか？」
「ハッ!?そうだったぁ！」とパッと表情が変わる束。
束「ついに完成したよ！ＶＦ―２５シリーズ！」
束がＶＦ―２５シリーズを完成させたと一夏に告げた。

これに対して一夏とミハエルは驚いた。
一夏「い、1週間で!?」
ミハエル「な、何!?」

一夏たちはパンドラというラボに居た。
中にはまだ塗装されておらずシルバーに輝くファイター形態のＶＦ―２５Ｆ、Ｓ、Ｇ、がガンポッド（スナイパーライフル）を兵装した状態で正面に横列で並んでいた。
一夏「す、すごい……」
ミハエル「い、一週間で3機を造るとは……」
一夏とミハエルは唖然としながらも口にする。
晴人と弾は「おお！」驚きの声を上げる。
向こうの世界ではＶＦ―２５一機製造するのに最低1ヶ月が必要だった。
だが束は1週間でＶＦ―２５シリーズ全機を製造したのだ。
束「どうだぁ！この天災と言われる束さんのスゴさは！」
両手を腰に当て胸を張る束。
一夏とミハエルは3機のバルキリーの主翼、垂直尾翼、水平尾翼、そして細かい各部を厳しくチェックする。

すると外側のコックピットの前にある紫色に輝くものを見つけた。
一夏「お、おいミシェル……見てみろよ……」
最初に気付いた一夏は目を見開きミハエルを呼ぶ。
ミハエル「どうした一夏？」
ミハエルはＶＦ―２５Ｇの先端に座っている一夏の方に近寄り近くにあった脚立で登り一夏が見ている方に目を向けた。
ミハエル「なっ!?こ、これは⁉?ま、まさか!?」
一夏が見る先にある紫色に光る物に驚き声を張り上げるミハエル。
一夏「ああ、フォールドクォーツだ。」
そう確信した一夏。
だが束は違うと言った。
束「それはいっくんとみっくんが言うフォールドクォーツじゃないよ。」
ミハエル「違う?じゃあ一体これはなんですか?」
束「えーとね、みっくんから聞いたけんだけどフォールドクォーツは大宇宙にあるんでしょ?流石にこの私でも無理があるよ。だけどね、この地球と月の裏側にはフォールドクォーツと同じ性質を持つ鉱石『ジャンプクォーツ』が存在してるんだよ!」
一夏「ジャンプクォーツ?何処かにジャンプするんですか?」

束「そう！けど地球原産のジャンプクォーツは大体地球の半分の範囲しかジャンプできないんだよ。でも月原産のジャンプクォーツは地球全体なんだよ！」
一夏「まるで超小型化したフォールドブースターがバルキリーに搭載しているようなもんだな。」
ミハエル「じゃあこの3機のバルキリーに搭載されているジャンプクォーツは？」
束「月原産だよ！」
どうやって持ってきたんだよ、と一夏とミハエルは思った。
束「でも、ジャンプクォーツはフォールドクォーツの代用だからジャンプできないから。まぁいずれジャンプ出来るようにするから待っててね。」
一方の晴人と弾とクロエは1機ずつバルキリーを眺めていた。
弾「スッゲェな晴人。」
晴人「う、うん。戦闘機だけどロボットに変形するんだよね？なんだかロボットアニメの世界にいるみたいだよ。」
弾「ＩＳも同じだろう。」
晴人「だね。しかし、戦闘機をこんな近くで見るのも初めてだけど、久しぶりに戦闘機を見たよ。」
弾「ああ、ＩＳが世界に知れ渡った時だよな。」

クロエ「今でも戦闘機を所有している国はフィリピン、ジャマイカ、アフリカ、チェコスロバキア、そしてシリア。どれも経済が訳ありで女尊男卑がない国なんです。」
そう会話しながらバルキリーを見る晴人たち。
一夏とミハエルはそれぞれコックピットに乗り計器に異常がないかチェックする。
そこに束が脚立に登ってコックピットの外側から嬉しそうに一夏を見る。
束「これでＳＭＳが立ち上げれるね。」
一夏「はい、でも正直オペレーターや経営担当が出来る社員が居ないのは厳しいです。」
束「ねぇいっくん、束さんの知り合いで経営担当出来る人たちがいるんだけど。」
一夏「スコールとオータム、そしてマドカですよね？」
スコール、オータム、マドカ。
彼女らは束の仲間であり、現在ＩＳの戦闘データを収集しに向かっている。
束「ほふぇ!?なんで知ってるの？」
一夏「束さんがラボにこもってバルキリーを造っている間、ＩＳを教えに来てくれたんですよ。」
計器を触り不備がないか確認する。
その時だった。

束のポケットからアラートが鳴った。
ポケットから小さな長方形のリモコンを取り出す。
するとリモコンから立体映像が映し出されそこに椅子に座って寛いでいるスコールが映し出された。
どうやらこれは束の携帯電話らしい。
束「おひさースコーリュン☆」
スコール『ええ、お久しぶりね束。』
束「それでどうしたのスコーリュン？束さんに電話を掛けてくるなんて相当な事があるのかな？」
スコール『ええ、そうよ。そこに一夏くん居るかしら？』
一夏「ああ、ここに居る。」
スコール『お久しぶりね一夏くん、顔が見えないけどまぁいいわ、束も聞いてちょうだい。』
束「オーケー☆」
一夏「で、何の用だ？俺絡みの事か？」
スコール『残念だけど違うわ。ニュースつけてくれるかしら？と言ってもあなた達がいる所はラボよね。今イギリスの首都ロンドンでテロが起きてるの。」

束「テロ？」
スコール『ええ、けど爆弾テロや集団テロと言った汚い手段で実行するテロじゃないの。』
一夏「どうゆう事だ？」
スコール『つまりテロリストが正々堂々とロンドンに向かってるって事よ。』
一夏「はっ？向かって来てるってその前に軍に叩かれてるだろ？」
スコール『それが逆に叩きに向かったＩＳ部隊が壊滅したのよ。』
束「ＩＳが全滅⁉？」
声を張り上げた束に他のみんなが振り向き近寄る。
一夏「実行犯が使っている兵器は？」
スコール『それが信じられないけど航空要塞だわ。そしてそれを守る４機の戦闘機Ｓｕ―３７よ。この戦闘機のパイロットたち、ほぼＩＳを確実に落としていくの。それにイギリス政府の情報では航空要塞に目に見えないシールドが貼られてるらしいわ。』
一夏「航空要塞……」
スコール『ええ…今でも信じられないわ……ロンドンは壊滅状態、だから貴方の力でロンドンを救って欲しいの……私の生まれ故郷なの……』
一夏「…家族が居るのか……」

スコール『父と母……祖母が居るの…政府は混乱状態で非常事態宣言が発令していないの……お願い一夏くん…ロンドンを…家族を……守って…』
一夏「……俺の条件を呑んでくれるなら引き受ける……」
スコール『条件……』
一夏「ああ、俺はＳＭＳと言うＰＭＣを立ち上げた。だが戦闘員はいるが経営担当が少ない状態でな、そこでだスコール。お前とオータム、マドカと一緒に経営担当としてＳＭＳ社員になって貰いたい。」
スコール『いいわよ……データ収集以外私たち暇だから…』
一夏「了解した、依頼を引き受けよう。」
スコール『ありがとう……一夏くん…』
スコールは電話を切った。
いつの間にかパンドラの中は静まり返っていた。
一夏はコックピットから降りた。
束「いっくん行くの？」
真剣な表情で言う束
一夏「ああ、行きますよ。まさか最初の仕事がこんな大きな仕事だとは思いませんでしたけど。」

ミハエル「まぁウチの会社の宣伝にもなるしな。」
ミハエルはそう言い掛け直しながらニヤリと笑う。
一夏は「まぁな。」と言い少し間を空け晴人と弾に真剣な顔を向ける。
一夏「晴人、弾、此処にあるＶＦ―２５Ｆ、Ｇ、はお前たちの為に束さんに造って貰った。だから此処で俺のドッグファイトを見ておけ。」
晴人「わかったよ兄さん。」
弾「ああ！だが死ぬなよ一夏！」
一夏「フッ俺はそんなタマじゃない。」
と一夏は二人に言う。
次にクロエに顔を向け此処からロンドンへの最短ルートを聞いた。
クロエ「一夏さんの機体なら弾道ミサイルのように宇宙に上がりそこからロンドンに向かうのが一番の最短ルートです。」
一夏「わかった、すぐに準備する。」
パンドラを出て部屋に戻ってパイロットスーツに着替えヘルメットを持ち滑走路に向いガウォーク形態のＶＦ―２７ルシファーに乗りヘルメットを被る。
一夏「クロエ準備は出来た、滑走路を上げてくれ。」
クロエ『わかりました、滑走路を上昇させます。』

ブザーが鳴り一瞬揺れ滑走路は上に上昇する。
その間に全システムを起動しルシファーを起動させ機体のチェックに入る。
そして滑走路はラビットハウスの甲板に上がった。
クロエ『レーダーに機影の反応なし、立体映像を解除、いつでも発進出来ます。』
一夏「了解、各エンジン良好、圧力異常なし、全システムオールグリーン、出る！」
ルシファーは少し上昇しファイターに変形し最大スピードで一気に上昇し宇宙へと飛翔した。

英国、イギリス。
ロンドンを中心とし政治、経済バランスが安定で有名な国である。
歴史や文化が長く、ウェストミンスター宮殿、タワーブリッジ、を始め多くの歴史深い建物が存在し年間何万人もの観光客がイギリスに来る。
だがそんなイギリスのロンドンは今、テロによる攻撃を受けていた。
空から爆弾が降りロンドンに落ち爆発し黒煙が上がる。
爆発が降って来た方角にブーメラン型の巨大航空要塞が飛んでいた。
そこにリヴァイヴを纏った４機のイギリス軍ＩＳ部隊が接近していた。

だが航空要塞を守る４機のＳｕ―３７のバルカン砲の攻撃が見事にヒットし爆発を起こした。
そして爆炎の横を１機ずつ通過して行き元居た航空要塞の背後に並列で飛ぶ。
???????『ヒャッフォオオオオ！この新装備イケるぜ！』
オルマ『オルマ中尉、作戦中は私語を慎め。』
キリアコフ『方苦しい事言うなよスレイマニ隊長！おいトーリャ、何かゆったれ！』
???『ガハハハッ！こりゃ凄いもんだぜ隊長。』
スレイマニ『ああ！機体はダメだけどこの新装備は世界で一番の美しい物だよ！』
ヴィルコラク遊撃隊の隊長を務める「ミロシュ・スレイマニ」は新装備に興奮する三人の部下たちに呆れる。
ガリビア『そりゃそうだろ？ＩＳが誕生して俺たち（戦闘機パイロット）お払い箱になったんだぜ？そして俺たちはテロリストと言う形で新装備ぶら下げて久し振りに飛んでいるんだ。』
確かにガリビアが言っている事には同感するスレイマニ。
だが興奮している三人の部下がＩＳに堕とされたらたまったもんじゃない。
スレイマニ『興奮するのはいいが、作戦に集中しろ。新装備がＩＳに効いているが、こ

のＳｕ―３７の機体はＩＳにとって脆い物だ。それだけは頭の中に入れとけ。』
レーダーに１機のＩＳを補足しアラートが激しく鳴った。
スレイマニ『回避。』
ヴィルコラク遊撃隊は二手に分かれた。
するとスレイマニが元飛んでいた場所から真下からビームが飛んで来た。
ビームを発射されたところに目を向ける。
そこに巨大なレーザーライフル「スターライト」を構え蒼いＩＳ「ブルー・ティアーズ」を纏う金髪のロングヘアの国家代表候補生「セシリア・オルコット」が居た。
セシリア「わたくしたちの国をよくも滅茶苦茶にしてくれましたわね！さっきのは威嚇です。もうこれ以上は好き勝手にはさせませんわ！このわたくしセシリア・オルコットが祖国イギリスに手を出した事を後悔させてあげますわ！」
敵に届かないのに声を張り上げるセシリア。
その間に旋回し編隊を組み直しているヴィルコラク遊撃隊。
そしてスレイマニは部下たちに指示を出した。
スレイマニ『相手の狙撃は正確だが集中し時間が掛かっている。一列になり相手のビーム発射後、散開し左右前後から一気に叩く。』
部下達は「了解」と告げる。

スレイマニ『行くぞ、ヴィルコラク遊撃隊。』
スレイマニの機体が急降下しそれに続き、オルマ、キリアコフ、ガリビア、の順で急降下し一列になる。
セシリア「一列でこちらに来るとはどうやらこの『スターライト』のビームで串刺しにされたいようですわ…ね！」
スコープで狙いを定めスターライトを放ちビームがスレイマニ達の方へと向かって来る。
決まった。
セシリアはそう思った。
だがその予想は裏切られた。
スレイマニ『今だ、全機散開。』
ヴィルコラク遊撃隊は散開しビームを避けた。
セシリア「なっ!?」
そして指示通りに左右前後に散らばりセシリアを囲みロックする。
セシリア「ま、まぐれですわ！こうなったらッ！」
セシリアは背中に搭載されている４基のレーザービットを射出し攻撃する。
ヴィルコラク遊撃隊は一旦回避しセシリアと距離を取る。

セシリア「まだまだですわ！」
４基のビットは散らばったヴィルコラク遊撃隊の背後に回りビームを発射する。
だが背後を取られてもヴィルコラク遊撃隊は避ける。
セシリア「どうして当たらないのですか！たかが戦闘機に！」
ビットが敵に命中しない事に苛立ち声を上げるセシリア。
スレイマニ『全機、共同で後ろにまとわり付いている虫を撃墜しろ。』
ガリビア、キリアコフ、オルマ、『了解！』
スレイマニーはガリビアのビットを、ガリビアはスレイマニーのビットをバルカン砲で破壊する。
オルマ『よぉトーリャ！お前のケツ拭きに来たぜ。』
オルマはキリアコフの後ろにつきキリアコフにまとわり付いているビットをロックした。
だがビットの前にキリアコフの機体がある為攻撃が出来ない。
「それじゃあお前のケツが拭けねから上昇しろ。」とオルマが言う。
キリアコフ『そりゃどーも。』
キリアコフは呆れた声で返事をし一気に操縦桿を引き急上昇する。
これでキリアコフに当てなくて済む。

オルマ『ファイヤ！』
オルマはバルカン砲でビットを破壊した。
キリアコフは逆に急降下し真上からオルマの後ろに付いてきてるビットをバルカン砲で破壊した。
セシリア「そ、そんな!?わたくしのブルー・ティアーズが!?」
声を張り上げ絶句するセシリアは再びスターライトを構えオルマ機に向ける。
しかしスレイマニーが放った一発のミサイルで破壊された。
セシリア「キャアアアアア！」
セシリアは悲鳴を上げながら爆風と爆発に煽られ落ちて行った。
だが何か大きな物に包まれて受けてめられた。
それを確かめるとそれは大きな「手」だった。
よく見てみればロボットの手だった。
上を向くとこっちを向いているロボットの顔があった。
そのロボットはＩＳより大きかった。
するとロボットから声が発せられた。
???『大丈夫か？』
その声は男性だった。

このロボットの中に人が乗っているだろうと思うセシリア。
しかし男性嫌いな彼女にとって最悪だった。
だが助けてくれた事には感謝した。
セシリア「助けてくれて有難うございます。」
???『礼なんていい、それよりもここから離脱した方が方がいい。』
男性の言葉に腹が立ったセシリア。
セシリア「その言葉は私が貴方に言う言葉ではありません事？」
???『レーザーライフルとビットを破壊された奴が何を出しゃばっている。』
男性はセシリアと４機の戦闘機の戦闘を見ていた。
セシリア「なっ!?それは……数が多いからですわ！あんな戦闘機ＩＳでー　」
???『じゃああれはどう解釈するんだ？』
男性はロボットの首を動かしある方へと顔を向ける。
その先には航空要塞を堕とそうとする大人数のＩＳ部隊がいた。
だが４機の戦闘機に次々と堕とされていくのだった。
セシリア「そっ！そんな!?ＩＳ部隊が!?」
ハイパーセンサーでその様子を見たセシリアは驚愕する。
???『戦争を経験した事もない奴らが戦争を経験している奴らに勝てるわけがないだ

ろ。しかもパイロットは相当のプロだ。いいか？勝てないのはそれが理由だ。』

事実を述べた男性。

しかしセシリアはロボットの手から離れ空中に浮き男性が述べた事を否定した。

セシリア「そんな事はありませんわ！ＩＳは世界最強、負けている理由はＩＳが量産型機（リヴァイヴ）だからですわ！」

???『じゃあお前はどうなんだ。そのＩＳは量産型機じゃないだろ？』

セシリア「グッ……」

不意を突かれたかセシリアは黙ってしまう。

???『もういい、お前と話してもその間にロンドンの被害が大きくなるだけだ。とりあえずお前は此処から離れろ。』

するとロボットは戦闘機に変形した。

セシリアは目を見開き戦闘機に変形した事には驚く。

戦闘機は一気に戦場と化している航空要塞の空域まで飛翔した。

ＩＳより遥かに超える速さにセシリアは唖然と宙に立っていた。

ドッグファイト

ガリビア『こいつで最後だ！』
ミサイルを発射し最後のＩＳ部隊の隊員を撃墜したガリビア。
旋回してスレイマニ達と合流しヴィルコラク遊撃隊は並列飛行しながら航空要塞「オルゴイ」の元へと飛翔する。
スレイマニ『オルゴイは間も無くロンドンの中心部に着く、さっきよりも戦闘が激しくなるだろう。全機本気を出せ。』
オルマ『肩慣らしも終えたところだし、いっちょドカンと行きますか！』
キリアコフ『やっと本格的に戦える！』
ガリビア『ガハハハッ！腕が鳴るぜ！』
その時だった。
スレイマニのレーダーに何か反応した。
スレイマニ『レーダーに反応……』
ＩＦＦに反応していない……
オルマ『どうした隊長？』

オルマが声を掛けたがスレイマニは返事を返さずレーダーを見つめていた。
隅っこにあった白い点がありえない速さで真ん中に近寄る。
スレイマニ『リバース！』
スレイマニの言葉に驚き部下たちは並列飛行を解いて散らばる。
すると真下から黒い戦闘機が飛んで来た。
それは見た事もない戦闘機だった。

一夏はヴィルコラク遊撃隊と接触した。
真上を飛んでいたヴィルコラク遊撃隊は一夏が搭乗しているルシファーが急上昇し近づいてくる事に気づき並列飛行を解いたのは５０メートル先だった。
一夏はルシファーをそのまま通過し捻り込みしてヴィルコラク遊撃隊と同じ高度で飛びそしてオープンチャンネルを開いた。
一夏「此方ＳＭＳのナイト１だ、あるクライアントの依頼でお前たちテロリストを撃墜しに来た。」
スレイマニ『……』
それを聞いたヴィルコラク遊撃隊は返答しなかった。

敵に喋る口はないかと一夏は思い少し笑う。
一夏「まぁいい、今から一匹ずつ撃墜させる。」
一夏は素早くペダルと二つの操縦桿を細かく操作しある機体の真横をとらえた。
その機体はガリビアが乗っていた。
コックピットからルシファーの機動性に驚くガリビアの顔がはっきりと見えた。
ビームポッドで何発か連射しガリビアのＳｕ―３７に命中し墜落した。
一瞬の出来事だった。
オルマ『ガリビアぁ！』
墜落していくガリビアのＳｕ―３７。
主にコックピットを狙ってない為ガリビアは脱出出来た。
一夏『安心しろ命は取らない分残りの人生ムショでの生活にしてやるよ。』
キリアコフ『ふざけやがって！』
言葉に痺れを切らしたキリアコフは急速旋回しルシファーの後ろを取る。
キリアコフ『その機体を今直ぐ綺麗な花火にしてやる！』
もう少しで一夏のルシファーをロックする。
キリアコフは操縦桿のミサイル発射ボタンに指を掛け何時でも堕とせるようにする。
だがそれは出来なかった。

キリアコフ『なっ!?』
予想していなかった事が起きた。
敵の戦闘機が『変形』したのだ。

ロックした敵（一夏）の戦闘機（ルシファー）が人型のロボットに変形しながらキリアコフの真上にピタリとつき飛翔しているのだ。
スレイマニーとオルマは目を見開いて今起きている事に驚いた。
オルマ『なんだありゃ!?』
スレイマニ『変形した……だと?』
唖然としたスレイマニはただその様子を見る事しかが出来なかった。
バトロイドでキリアコフの上にピッタリとついている一夏。
照準をキリアコフのＳｕ―３７のエンジンに合わせる。
一夏「散れ。」
アサルトモードのビームポッドで一発撃ち込みＳｕ―３７を直線に貫いた。
キリアコフは脱出出来たが自分のＳｕ―３７は無残に散った。
オルマ『クソッ!トーリャがやられた!どうします隊長!』

スレイマニ『落ち着け、連携攻撃を仕掛ける。』

２機目のＳｕ―３７を撃墜した一夏。

敵が接近してくる事を知らせるアラートが鳴り始めた。

残り２機のＳｕ―３７に視線を向けると２機のＳｕ―３７は一列になって此方に向かって飛行していた。

連携攻撃を仕掛けてくる。

ビームポッドをライフルモードに変え先頭のＳｕ―３７の左の主翼に狙いを定め放った。

紅色のビームが先頭のＳｕ―３７の左主翼目掛けて飛んでくるが紙一重で避けられた。

しかし先頭のＳｕ―３７がギリギリ避けた所為で後ろのＳｕ―３７の左主翼を貫き爆破した。

幸いパイロットは脱出していた。

だがそんな事は気にしない一夏は攻撃を避けたＳｕ―３７に少し驚いた。

一夏「攻撃を避けたのか……あの戦闘機パイロット、ベテランだな…」
攻撃を避けたＳｕ―３７のパイロットは相当勘が鋭いベテランパイロットだと悟った。
Ｓｕ―３７は真っ直ぐ此方に向かって来てる。
そしてロックされミサイルを一発放った。
真っ直ぐルシファーに向かってミサイルは飛んでくる。
しかし一夏はビームポッドをアサルトモードに切り替え余裕でミサイルを撃墜した。
一夏「大体こんなもんか……」
Ｓｕ―３７のベテランパイロットは自慢の攻撃だったのだろう。
向こうの世界のドッグファイトはミサイルを一回に何十発という数を発射するしそれをガンポッドで落とすのは普通だった。
一夏はバジュラたちと何回も戦っている。
バジュラの体内から作り出される無数のミサイルを避けたりビームポッドで破壊して来た。
一夏「こんなところで時間を掛けている暇はない。」
気付けば航空要塞はもうロンドン中心部に入る頃だった。
ルシファーをファイターに変形し高速機動でＳｕ―３７の後ろを取った。

一夏「遊びはおしまいだ、堕ちろ。」
その言葉はオープンチャンネルで４機目のＳｕ―３７のパイロットに放った言葉だった。
そしてライフルモードのビームポッドでＳｕ―３７の右垂直尾翼と右主翼を貫き撃破した。
これで４機のＳｕ―３７を撃墜し次の敵航空要塞の撃墜に向かった。

ロンドン中心部
街の何箇所かから黒煙が立っていた。
ブーメラン型航空要塞「オルゴイ」が街に攻撃を開始しているのだ。
無数のＩＳ部隊と街に配備された撃墜用ミサイルでオルゴイに攻撃を仕掛けたが見えないシールドと対空砲、対空ミサイルで防がれ逆に攻撃を受けた。
『クソッ！なんてデカ物なの！』
『攻撃が効かない!?』
『だ、弾幕が！……きゃぁぁぁぁぁぁ！』
『どうすれば…どうすればいいんだ！』

隊員たち混乱状態。
それでもオルゴイに攻撃をする。
だが結局二の舞になってしまう。
すると見た事もない1機の黒い戦闘機が隊員たちの横を通って行った。
一夏が搭乗しているルシファーである。
一夏「此方ＳＭＳ、ナイト1よりイギリス軍全ＩＳ部隊へ、これより敵航空要塞の撃墜及び破壊に参加する。」
一夏はオープンチャンネルで全ＩＳ部隊にそう告げた。
『ＳＭＳ?ＰＭＣかしら?』
『そんな会社聞いた事もないわよ。』
一夏「フッ、今日出来たばかりのＰＭＣだ。あるクライアントの依頼でこの航空要塞を撃墜しに来た。」
『はっ?戦闘機があのデカ物に勝てるワケ?』
『ハハッ!冗談言わせないでよ!』
完全に見下されている。
一夏『ナイト1攻撃体制に移行する。』
オープンチャンネルを切り一夏は再び操縦桿を握る。

そして機体を航空要塞に向けて飛翔する。
航空要塞に近づくたび弾幕が激しくなるが、ルシファーの機動性を利用して避ける。
『っ!?な、なにあれ!?』
『なんて機動性と速さなの!?とてもＩＳでも追いつけない！』
『どうしてあんな激しい弾幕を軽々と避けれているの!?』
さっきまでルシファーを見下していたＩＳ部隊の大半の者たちはルシファーの機動性とスピードに驚き唖然としていた。
するとあっという間にルシファーはオルゴイの後ろを取った。
一夏「アレがエンジンか…」
オルゴイの主翼に排気ノズルつまりエンジンがあった。
そこで一夏はエンジンを狙う事にした。
しかし問題があった。
オルゴイには見えないシールドが展開されている。
このシールドを破らなければエンジンを破壊する事が出来ない。
ＩＳ部隊はこのシールドで苦しんでいた。
だが、
一夏「やってみなければ分からない！」

バトロイドに変形しライフルモードのビームポッドを構えオルゴイの右主翼エンジンを狙い撃つ。
ビームはオルゴイの右主翼エンジン目掛け飛ぶ。
するとビームはオルゴイの前で何かを破った。
オルゴイのシールドを破ったのだ。
そして右主翼エンジンに命中し貫通した。
更に一夏は左主翼エンジンも貫いた。
オルゴイの主翼エンジンは爆発を起こし黒煙を上げ機体制御が不能になった。
高度が少しずつ落ちテムズ川に巨大な水柱を立て墜落した。
そして5秒後に爆発した。
ルシファーをガウォークで旋回させコックピットの中からその様子を見ていた一夏はプライベートチャンネルの周波数をラビットハウスに合わせクロエと交信した。
一夏「此方一夏、攻撃目標の航空要塞と4機の戦闘機の撃墜を完了した。」
クロエ『了解しました。あとは軍の方々にお任せしましょう。』
一夏「了解。ミッションコンプリート、帰投する。」
クロエとの交信を切ってラビットハウスに帰投する一夏。
その時、さっきまで唖然としていたＩＳ部隊の隊員たちが目の前に現れた。

そして全員此方に火器を構えひとりの隊員が前に出てオープンチャンネルに話し掛けて来た。
『戦闘への参加そして謎の航空要塞の撃墜に感謝します。ですが貴方のその変形する高機動の戦闘機、あの航空要塞の見えないシールドをたった一撃で破壊し装甲を貫くその武器、世界中で見た事がありません。』
一夏『何が言いたい。』
少し苛立った声で一夏は隊員に問いかけた。
『貴方のその戦闘機の機動性と武器は次元を超えています。なので貴方の身柄を預からせて貰います。』
そんな事か、と一夏は呆れて鼻で笑う。
一夏「フッ、どうせこの兵器を自分たちの国の物にするつもりだろ？生憎こっちは会社の技術は極秘で何処の国にも渡せれない代物だ。」
そう言いＩＳ隊員たちに背を向ける。
隊員たちはいつの間にか下ろしかけていた火器を構え直し警戒する。
『では貴方に取ってその戦闘機はなんですか？』
簡単な答えだ。
崩れ掛けた世界を戻す為。

居場所をなくした人たちの為。
このバルキリーは世界を直し未来を繋ぐ「翼」である。
一夏「未来への翼だ。」
一夏はそう行ってルシファーをファイターにして宇宙へと飛翔して行った。

ロンドンから謎の武装組織の攻撃を阻止した一夏はラビットハウスのブリーフィングルームで、ミハエル、束、クロエ、晴人、弾が椅子に座り埋め込まれている大型モニターで1時間前起きたロンドンテロのニュースを見ていた。
『先程1時間前、イギリスの首都ロンドンで謎の武装組織の攻撃がありました。信じられませんが謎の武装組織は巨大な航空要塞でロンドンを襲いました。これに対しイギリス政府は軍に要請、ロンドン空域にＩＳ部隊を配備しました。しかし航空要塞の兵装と目に見えないシールド、そして４機の戦闘機により壊滅状態になりました。ですがイギリス軍の情報によりますと、見た事もない戦闘機が突然現れ４機の戦闘機を撃墜し航空要塞も撃墜したとの事です　ー　』
束「流石に情報規制されてるよねぇ～これじゃー会社の宣伝にもならないよぉ～」
わざとらしく肩を落とす束。

すると隣でノートパソコンを使って何か探していたクロエが口を開いた。
クロエ「確かにテレビでは情報規制が掛かってますがインターネット上では情報規制は掛かっていません。」
クロエはパソコンの画面を大型モニターで映した。
有名な動画投稿サイトを開き、ある動画を再生した。
それは地上から撮影された４機のＳｕ―３７を撃墜しているＶＦ―２７ルシファーだった。
そしてもうひとつルシファーがスピリタスを撃墜する動画もあった。
コメント欄を見てみると「あの黒い戦闘機変形した!?」「なんだあの機動性は!?」と驚きのコメントを上げている。
クロエ「現地の人たちが撮影しそれをインターネットやＳＮＳなどに拡散しているようです。」
その所為でインターネットの情報規制を掛ける事が出来ないらしい。
するとクロエのパソコンからビデオ電話が掛かって来た。
開くと大型モニターに椅子に腰掛けているスコールが映った
スコール『祖国を守ってくれてありがとう一夏くん。お陰で家族も無事だわ。』
一夏「仕事したまでだ御礼なんて別にいい。約束は守ってくれよ。」

「全く、つれないなお前は。」とミハエルは両手を頭に組んで後ろにもたれる。
スコール『勿論よ、明日あの子たちと合流してそっちに向かうから後で座標を教えて頂戴。それより一夏くん、貴方イギリス政府に好かれているわね。』
晴人「好かれている？どうゆう事ですかスコールさん。」
スコール『一夏くんのあのバルキリーを見てイギリス政府は今後、一夏くんを全力で探しすそうよ。』
一夏「どうせルシファーを量産して自分の国の兵力にするつもりだろ、考えが見え見えだ。」
束「いっくんのバルキリーにそんな事したらこの束さんは許さないぞー！」
頬を膨らませプンプンと束は怒る。
一夏「何があろうとルシファーや他のバルキリーは渡さない。例え世界の敵になろうがな。」
その言葉を聞いてスコールは小さく笑った。
スコール『それじゃあ私はこれで失礼するわ。クロエちゃん後でそちらの座標をメールで送くって。』
クロエ「かしこまりました。」
スコール『それじゃあ失礼するわ。』

スコールとのテレビ電話を終え大型モニターは動画投稿サイトに戻った。
その後、ロンドンでテロ行為を犯行し世界を震撼させた謎の武装組織の声明がインターネットで投稿された。
彼らは「ヴァラヒア」
中東アジア、中央アジアの軍事コンサルタント「ニコラエ・ドゥミトレスク」という人物を中心に旧統合共産諸国と男尊女卑を母体とする同志を集め女尊男卑壊滅と共産主義の実現を目的とした武装組織である。
そしてロンドンを救った一夏は仮のコールサイン「ナイト1」とＩＳ部隊に名乗った後にロンドンを救った「英雄の騎士」と呼ばれた。

新たな力

ロンドン襲撃事件から二週間が経った。
今のところヴァラヒアによるテロ行為は起きていない。
一夏と晴人、弾は束に呼ばれて束のラボに来た。
束「やーやー三人とも来てくれてありがとう！」
一夏「それで今回はなんですか？」
すると束の後ろに三つのコンテナが現れた。
束「完成したんだよ！いっくんとはっくんとだっくんの専用機！」
大きく飛んで喜ぶ束。
弾「ほ、ホントっすか？束さん？」
束「この束さんが嘘をつくわけないでしょ？それじゃー早速ごたーいめーん☆」
ポケットからリモコンを取り出しポチッとボタンを押した。
すると三つのコンテナがプシューー！と音を立てパージしそこから塗装されていない
３機のフルスキンのＩＳが現れた。

一夏「こ、これは!?」
一夏たちは目を疑った。
自分たちの専用機が所有しているバトロイド形態のバルキリーに似ている、いや同じだった。
束「フフーン、驚いたでしょ？」
晴人「驚くってそりゃあ驚きますよ！僕たちのバルキリーとほぼ同じじゃないですか!?」
束「ほぼじゃないよ一緒だよ☆だけどシステム面でと武器は大幅（ＩＳ）に変わっているけどね。」
少し間を空けて束はまた喋り出す。
束「そしてこれは見た目ＩＳだけどＩＳじゃないんだよー」
その言葉に三人はハテナを浮かばせる。
束「それはね！ファイターに変形するんだよ！」
束が放ったその言葉は衝撃的な言葉だった。
「ファイターに変形する」一夏たちは驚いた。
人体に影響はないのか？と三人は思ってしまうが、束が三人の心を読んだのか「人体に影響はないよ！」と言った。

束「それじゃあ、はっくんの機体から紹介するね！はっくんのは左のだよ！」
束は左の機体ＶＦ―２５Ｆを指差した。
束「ナンバー００１機体名『大和』ウェポンはガンポッド、マイクロミサイル、ナイフ、シールド、ピンポイントバリア、この四つは標準装備でだっくんといっくんの機体にもあるよ！はっくんは剣類が得意からメインウェポンは双剣『桜』だよ。そして『千本桜』『三千世界』この二つのアビリティがあるんだよ！次はだっくんね。」
真ん中の機体を飛ばして右の機体ＶＦ―２５Ｓを指差した。
束「ナンバー００２機体名『フレイア』ウェポンは標準装備、メインウェポンは完全フルオートの２丁銃『フェニックス』そしてアビリティは『一斉攻撃』と『レイニー・ザ・ガン』でーす！さー最後はいっくんだね。」
束は最後の真ん中の機体ＶＦ―２７を指差した。
だがよく見てみると主翼のエンジンがなかった。
一夏から見ればこの機体はＹＦ―２４に似ている。
束「ナンバー０００機体名『ナイト』。ルシファーと同じ高機動性を持つ機体だよ！ウェポンは標準装備、メインウェポンはルシファーと同じなんだけど……」
何故か束は口ごもってしまった。
一夏「束さん？」

束「実は大和とフレイアにはコアを2基搭載してるんだけどナイトだけは4基搭載させているんだー、でも完成した大和とフレイアにはっくんとだっくんのデータを入力したらファースト・シフトしたんだけどいっくんのはしなかったんだよ。だから今のナイトのメインウエポンのライフルポッドとアビリティが使えないんだよぉ～」

肩を落とし残念そうに束は説明した。

だがそれよりも束の言葉に聞き捨てらない事をさらりと言った。

弾「た、束さん？今さりげなくすごい事言いましたよね？俺と晴人にコアを2基搭載とか一夏には4基って……」

ＩＳにコアを2基搭載なんてとんでもない事だ。

そして一夏のＩＳにコアを4基搭載しているなどと前代未聞だ。

束「理論上一体のＩＳにコアを2基搭載する事は不可能そして4基も無理。そこで私は別のマルチフォームスーツを開発したの。それがいっくんたちの機体。さっきも言ったけど、これはＩＳじゃないよ。バルキリーとＩＳが合わさった高速戦闘と変形を可能にした『インフィニット・バルキリー』通称『ＩＶ』なんだよ！」

一夏「……Ｉ…Ｖ…インフィニット・バルキリー……」

弾「これが…」

晴人「僕たちの専用機……」

三人は自分のＩＶを見る。
束は少し間を空け喋り始めた。
束「いっくんたち来年１６歳だよね？そこでいっくんたちに日本のＩＳ学園に行って戦闘データを集めて来て欲しいの。」
晴人「戦闘データ？」
一夏「あー、スコールたちがＳＭＳに回ったからデータを収集する事が出来なくなったワケか。」
一夏がそう推測すると束は「ピンポーンせーかーい☆」と両手で大きな丸を作った。
束「ついでにいっくんたちのＩＶの戦闘データも取れるし一石二鳥だからね。」
一夏たち三人は納得した。
一夏「別にいいですよ。そもそも約束してますから。」
晴人「僕もいいですよ。」
弾「二人と同じ。俺もオッケーっすよ束さん。」
三人は同意した。
その後、束から自分の専用機詳細が書かれた本を貰いラボから出て行った。
束はＩＶの量産型機の研究開発を始めた。
研究開発が終われば、ＩＶと量産型機、バルキリー、そしてＩＳを動かせる一夏、晴

人、弾を世界に発表する予定らしい。
一夏は部屋に戻り束から貰ったナイトの詳細本を読んでいた。
ナイトにどんなアビリティがあるのか確かめアビリティのページを開き読み始めた。
アビリティは三つあった。
すると、
一夏「……ッ!?」
その時、初めてナイトのアビリティを知った一夏は言葉が出なかった。
ナイトのアビリティはとんでもないものだった。

名前捨てた革命者たち

ヴァラヒアによるロンドン襲撃事件から数年が経ち西暦２０６２年の終わりの節目１２月３１日。

日本のある町の墓場に黒いスーツを着てサングラスを掛けた三人の少年たちが横に並び歩く。

その姿は大人のように見える。

だがこの墓場には誰一人も居なかった。

聞こえるのは乾いた風の音と革靴の歩く音だけ。

三人は左手にバイオレットカラーの花束を持ち左右いた二人は右肩に工事用のハンマーを担いで歩く。

そして少年らは足を止めた。

目の前に黒石で作られた３つの墓があった。

右の墓には「織斑　晴人」を刻まれ、左の墓には「五反田　弾」と刻まれ、真ん中の墓には「織斑　一夏」と刻まれていた。

何故、少年たちは此処に来たのか？

それは、
「本人」だからである。
だがそれは旧名である。
晴人と呼ばれた少年は今は「空・リーザ・バルコフ」
髪の色をブラウンカラーになり全くの別人になり弾と呼ばれた少年は「風馬・リーザ・レッグ」
昔は天然の赤毛のロングヘアだったが、今は黒色に染まっている。
そして一夏と呼ばれた少年は今は「翼・リーザ・バーフォード」
昔の姿と違い骨格が女性のに近く髪型も変わっている。
戦友のミハエルが見ればギャラクシーのブレラに似ている、と言われた。
少年たちは旧名で刻まれている墓に其々目の前に立っている。
黙ったまま花束を墓の前に置いた。
すると風馬が沈黙を破り呆れ笑う。
風馬「ハッ、まさか本当に墓があったとはな。」
それに続き晴人も口を開く。
空「しかも元住んでた町の近くにあるとはね、正直驚いたよ。ね、兄さん。」
話を振ってきた空に対し翼は応えた。

翼「ああ、しかも綺麗に磨かれてやがる……お前ら早いとこやるぞ。」
風馬「おう！」
空「うん！」
風馬と空はニヤリと笑い両手でハンマーをゆっくりと上げる。
翼は右手で銃の形を作り空気を圧縮させ衝撃弾を作り自分の墓に向ける。
そして自分たちの墓を破壊した。
風馬と空は勢い良くハンマーを振りかざし一撃で自分の墓を粉々にした。
翼は衝撃弾を放ち自分の墓を木っ端微塵にした。
風馬「意外に脆かったな。」
すると風馬は頭のバンダナを取り砕け散った自分の墓に捨てた。
翼「今日をもって俺たちは死んだ。そして俺たちは新しい人生を歩む、そして兄弟いや『リーザ』という苗字を持って家族になった。これからは何も縛られない、俺たちは思う存分この世界と戦える。いいな、空、風馬。」
空「うん！兄さん。」
風馬「ああ！翼。」
空と風馬はハンマーを捨て翼と共にこの場を去った。

翼たちは束と合流する為帝国ホテルの部屋で腰を掛けていた。
風馬「そろそろ時間だな。」
腕時計を見て時間を確かめる風馬。
その時ドアが開き黒いコートを纏ったショートヘアの女性が現れた。
束だった。
束「ヤッホーみんな、待ったかな?」
空と風馬は驚きの余り立ち上がった。
空「た、束さん⁉?」
風馬「ど、どうしたんすかその髪型ァ⁉?」
前までロングヘアだった束がショートヘアになっている事に驚く少年三人。
束「戸籍を抜いて新しい自分になったんだよ☆」
笑顔で爆弾発言する束に空と風馬は更に驚く。
だが束が戸籍を抜いた理由はあった。
保護プログラムにされている家族を開放する為だった。
驚いていない翼はその事を知っていた。
昨日、束が翼に伝えに来たからだ。
翼「それで、名前は決めましたか?」

戸籍を抜いたという事は名前がなくなる。
つまり束は名前がない状態だ。
彼女はニコリと笑って新たな自分の名前を言った。
ミミ「『ミミ・リーゼ・ラビット』それが私の名前だよ！」
ミミ・リーゼ・ラビット
つまり翼たちと家族になる。
翼「そうですか、じゃあこれで家族ですね『姉さん』」
風馬「ちょっとぉ!?何勝手に話進めちゃってんの⁉？」
空「そうだよ兄さん！」
話がよくわからない空と風馬はツッコむが「まーまー、そんなのいーじゃん。」と説明するのを面倒くさがる束。
ミミ「あっ！そうだ！三人に渡す物があったんだ！えーと……」
コートのポケットを漁るように何かを探す。
ミミ「うーんと……あっ！あった！」
ポケットから腕に着ける灰色のバンドを三つ出し翼たちに一個ずつ渡した。
風馬「これなんすか？」
ミミ「これは『ガンボックス』！名前の通り銃の箱。頭の中で欲しい銃をガンボック

スに命令するとＩＳ展開と同じように展開されるんだよ！これからつっくんたちは危険な目にあうかもしれないから護身用として作ったのだ！」
早速翼たちはガンボックスを右腕に着け銃を展開した。
「うん！ちゃんと起動しているみたいだね！」と束は満足し頷く。
翼は直ぐに収納して腕時計で時間を確かめた。
翼「時間だ、そろそろ行こう三人とも。」
銃を収納した空と風馬は無言で頷きミミは笑顔で「オーケー！」と言い全員部屋から出て行き下のフロントでチェックインしてロビーに向った。
するとロビーに黒いスーツを纏ったミハエルが翼たちに気付き手を振った。
翼たちもミハエルに気付きそっちに向かった。
ミハエル「よっ！…じゃなかった翼、チェックイン済ませたか？」
翼「ああ、済ませた。」
ミハエル「よし、じゃあ行きますか。車は外に用意してあるぜ。」
ミハエルが先頭に立ち帝国ホテルを出て黒のベルファイアに乗りミハエルが運転する。
二ヶ月前に運転免許を簡単に取得したミハエル。
だがカーナビを操作するのは苦手。

何せ異世界の彼から見れば「物凄く古いカーナビ」だから。
ようやく目的地のセットが出来た。
目的地は旧羽田整備地区。
約６０年以上前までは羽田空港の整備地区だったが今はプライベート機を所有する一般市民の整備地区として滑走路として使用されている。
車を走らせ翼たちを乗せたミハエルは高速道路を使って旧羽田整備地区へ向かった。
なぜ翼たちは旧羽田整備地区へ向かうのか？
それはＳＭＳの発表会見があるからだ。
理由はＳＭＳが急激に成長した事とバルキリー、ＩＶ、量産型ＩＶ、そして世界で唯一ＩＳ操縦出来る男性（翼、空、風馬）の発表をするからである。
ロンドン襲撃事件から一ヶ月が経った頃、ミミがＳＭＳのホームページを製作し条件付きで社員と戦闘機パイロットを募集を掛けたところ沢山の応募者が来た。
その所為か今、バルキリーの存在が世界に注目を浴びる事になった。
その時、束が２機のＩＶの量産型機を完成させた。
丁度、発表するタイミングが良いと考えたミミは翼たちと話し合いその結果、バルキリーとＩＳに乗れる自分たちの事も発表する事に決めのだ。
助手席に座っていた一夏はＦＭラジオをつけ音楽を聴きながらミハエルから貰った

メモ帳でプログラムを確認した。
車は高速を下り一般路を通り目的地、旧羽田整備地区に着いた。
車から降り御一行はＳＭＳ用として仮設された建物に入り待合室に入った。
中に入ってみるとＳＭＳ社員のスコール、オータム、マドカが居た。
ミミ「スコオオオオオオリュウウウウウウウウウン!!!」
いきなりミミが飛び出してスコールに飛び付く。
スコールはミミを受け止めず左に寄り避けた。
そのままミミは顔から床へとダイブした。
すぐに起き上がり「なんでハグハグしてくれないのぉ!」と子供のようにプンスカ怒るミミに「貴方が飛んでくるからよ。」とスコールは呆れた声で発した。
気を取り直してスコールは翼たちの方に体を向けた。
スコール「随分と早いわねみんな。」
翼「『本人』が遅れたら主催者側としてダメだろ。」
スコール「そうわね。『社長』が遅れたら困るわ。」
翼はＳＭＳの社長だった。
候補で社長を決めたところダントツ翼だった。
ミハエルを社長に候補した翼だったが「俺はそう言う柄じゃない。」と拒否されたの

だ。
オータムは窓から滑走路の真ん中にある会場の様子を見た。
オータム「おいおい、まだ1時間もあんのにもう沢山来てやがるぞ。」
呼び掛けるようにオータムは大声で言うと空と風馬とミハエルも近付き窓から会場を見た。
会場は報道陣や海外メディアたちで埋め尽くされていた。
今回の発表会見は報道陣とメディアだけの発表会見なのだ。
空「本当だ、まさかこんなに来るとは思わなかったよ。」
風馬「す、すごいな……」
報道陣とメディアの多さに驚く空と風馬。
ミハエルも驚くが初めての光景で唖然としている。
一方のマドカは発表会見では出番がない為、スマホを取り出しイヤホンを付け椅子に座って音楽を聞いてた。
賑やかに会話している翼たちは30分間続いていた。
30分後、翼たちは待合室から出て自分たちの準備をするべく別れた。
そして発表会見が始まった。

革命を

発表会見開始時間になった。
会場にいる報道陣たちが息を殺し待っていた。
すると前方のステージの右側から右手にマイクを持った女性が現れた。
彼女の登場で報道陣たちのカメラを光らせた。
スコール『お待たせていたしました。ただいまから、ＳＭＳ発表会見を始めます。司会進行を務めます、ＳＭＳ社経営担当部部長のスコール・ミューゼルです。よろしくお願いします。』
スコールは深々と一礼し司会を進めた。
スコール『注意事項があります。質問時間は設けてあります、発表中の質問はやめて下さい。尚、技術面の質問は我が社の企業機密なので技術面の質問はやめて下さい。注意事項を守らなかった場合、発表会見は中止します。』
彼女の眼は報道陣たちの息を呑み込ませるほどだった。
スコール『それでは、発表に移ります。南西の空に注目して下さい。』

報道陣たちは南西の空に視線を向けると同時にカメラも向けた。
するとカラフルスモークを噴射する3機の戦闘機が三角形の編隊飛行していた。
「変形する戦闘機」で話題になっている戦闘機だ。
すると報道陣たちは真ん中先頭の戦闘機が後ろの2機の戦闘機と違う事に気付いた。
良く見てみるとヴァラヒアによるロンドン襲撃の時、突如現れロンドンを救った「英雄の騎士」の戦闘機だった。
驚きの声を上げながら報道陣たちは英雄の騎士を撮った。
3機の戦闘機は編隊飛行をしながら会場上空を通過した。
通過した3機の戦闘機は急上昇して「人型ロボット」に変形し急降下した。
更に報道陣たちは「おおおお!!」と驚声を上げた。
そして地上から10メートルのところで「腕と脚が付いた戦闘機」に変形しステージの後ろへ着陸した。
コックピットのハッチが開きそこから出て来たのは見た事もないパイロットスーツと顔を覆い尽くすヘルメット姿で敬礼する三人、翼、空、風馬が現れた。
スコール『皆様ご存知の通り「変形する戦闘機」で世界中で話題になっている戦闘機です。正式名は「バルキリー」三段変形する可変戦闘機です。ここからはSMS創始者社長の翼・リーゼ・バーフォード社長がSMSの説明とバルキリーについて説明をしま

す。ではバーフォード社長お願いします。』

スコールに名前を呼ばれた翼はヘルメットを取り愛機のルシファーから降りてステージへと上がりスタッフからマイクを貰って真ん中へ立った。

報道者から「若すぎる…」「子供じゃないのか!?」と動揺の声がするが翼は無視して唇を動かし言葉を発した。

翼『ＳＭＳ創始者社長の翼・リーゼ・バーフォードです。まず先にＳＭＳについて説明したいと思います。ＳＭＳは「Ｓｔｒａｔｅｇｉｃ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｓｅｒｖｉｃｅｓ」の略語で現在はテロ組織の犯行阻止と壊滅を目的とし活動するＰＭＣです。』

翼が言っている事は半分嘘である。

翼『今後ろにいる二名のバルキリーのパイロットは私率いる精鋭小隊「デルタナイト」です。私は社長という柄ではなくどちらかと言うと訓練の指導と前線で戦うタイプです。さて自分の話よりバルキリーについて説明します。二名のパイロットについては後でお話しいたします。バルキリーは先程言った通り三段変形する可変戦闘機です。飛行形態は「ファイター」今後ろにあるバルキリー、みなさんが「両足、両腕が付いた戦闘機」と言っているのは「ガウォーク」という形態です。そして人型形態は「バトロイド」です。我が社の社員（戦闘員）はＶＦ―２５『メサイア』という量産機を使用しています。全長はファイターで１８．７２ｍ　全幅１５．５０ｍ　バトロイド時の全

高は１４．５３ｍ　です。攻撃兵装は１２．７ｍｍレーザー機銃、５８ｍｍガトリング式ガンポッド、アサルトナイフ、マイクロミサイル、防御兵装は防弾シールド、ピンポイントバリアシステム、アクティブステルスシステム、チャフ・フレアがあります。また、ＩＳのパッケージのように選択武装備があります。ＶＦ―２５の性能はＩＳを上回っており最高速度Ｍ（マッハ）５．０を記録しています。』

そんなまさかと報道陣たちの大半は呆れていた。

だが次の翼の言葉によって変わった。

翼『実際デュノア社のＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』、三菱社のＩＳ『打鉄』この２機のＩＳと同時に模擬戦をして２機とも絶対防御の範囲を軽く超えてしまい「破壊」という形でバルキリーが勝利しました。実際の映像があります。』

翼はスコールに顔を向け目で合図した。

スコールはコクリと頷きポケットから黒い延べ棒状の小型立体映像機（プロジェクター）取り出し翼の元へ向かい報道陣たちの真上に２ＤでＩＳとバルキリーの模擬戦映像を映した。

最初に映ったのは１機のＶＦ―２５がファイターで２機のＩＳ「リヴァイヴ」「打鉄」のアサルトカノンの攻撃から逃げているところだった。

２機のＩＳはＶＦ―２５の後ろを追いかける。

その時、ＶＦ―２５が徐々に斜め上に傾き始めた。
するとバトロイドに変形し華麗に回転しながら2機のＩＳの背後を取り右手に持っているガンポッドでリヴァイヴを攻撃した。
無数の弾丸を浴びたリヴァイヴは装甲が貫かれ４枚の他方向加速推進翼が蜂の巣になり爆発を起こした。
幸いＩＳのパイロットは気絶したままだがＩＳスーツの背中に着けていた自動パラシュートで脱出していた。
席から驚愕する声が彼方此方から聞こえてきた。
報道陣たちから見れば衝撃な映像で情報だ。
生中継で見ている人たちもさぞかし驚いているだろう。
映像はまだ続いていた。
アサルトカノンの弾を切らした打鉄はそれを投げ捨て日本刀の近接用ブレード「葵」を取り出しＶＦ―２５の左腕に斬り掛った。
だがＶＦ―２５のピンポイントバリアシステムが起動し左腕にある防弾シールドとともに防ぎ打鉄を振り払った。
それはまるで野球のように飛んできたボールをバットで打つようなものだった。
装甲も両肩部分の盾も砕け散り打鉄を纏ったパイロットは脱出したがリヴァイヴの

パイロットと同様気絶していた。
翼『ＩＳを纏っていたパイロット二名は体に異常はありません。』
翼たちは世界に衝撃を与えた。
世界最強と呼ばれたＩＳが１０ｍ以上の可変戦闘機にやぶれたのだ。
翼『コレでバルキリーの発表を終わります。ここで質問時間にします。何か質問ある方は？』
報道陣たちは続々と我こそはと手を上げた。
映像を切り小型立体映像機を元のポケットにしまったスコールがある記者を指名した。
指名された記者はその場に立ち上がりスタッフからマイクを貰った。
『フジテレビの……と言う報道番組の者ですがこのバルキリーは独自開発ですか？』
翼は答えた。
翼『ええ、勿論です。システムも全て独自開発です。これから発表するもの全て独自したものだと思って下さい。』
報道陣たちは「おおおお！」と動揺の声を上げる。
スコールは次々と記者を指名した。
『中日新聞の者ですがＶＦ―２５の「２５」とは他にもあると言う事ですか？』

翼『いいえ、「２５」というのは起動テストを２５回目でクリアし「ＶＦ―２５」と名付けました。』
当然嘘である。
次にスコールが指名したのは海外メディアの記者だった。
『アメリカのＭＭＭの者です。失礼ですが……バーフォード氏は何歳ですか？』
翼『１５ですが何か？』
報道陣たちは言葉を失った。
１５歳の少年が高度な技術と兵器を持つＰＭＣの社長なんて聞いた事もない。
ＭＭＭの記者は質問を続けた。
『で、では「英雄の騎士」も……』
翼『はい、「英雄の騎士」は私です。他に質問は？』
正直言いたくなかったが質問にはきっちり答える翼。
英雄の騎士の正体が少年だと知った報道陣たちは唖然と驚愕そして動揺が表情を見せる。
その所為か挙手していた者たちはいつの間にか手が下がっていた。
翼『それではバルキリーについての質問時間を終わります。』
確認した翼は質問時間を終わらせ一礼して上手側へと退場した。

スコール『では次の発表に移りたいと思います。我々　ー　』

その時だった。

空から人が降ってきた。

空気を切り裂くように音を立て落下しアイアンマンのようにステージの真ん中に着地した。

報道陣たちは口を開きぽかーんと唖然としていた。

これに対しスコールは手を額に当てやれやれとした表情でため息をついた。

何故なら空から落下して来た人物がスーツ姿のミミ・リーゼ・ラビット（旧名：篠ノ之　束）だからである。

彼女は立ち上がり何故かしら用意していたマイクで喋り始めた。

ミミ『はいはーい！みなさーん！こんにちはー、ＩＳの生みの親「ミミ・リーゼ・ラビット」こと旧名「篠ノ之　束」だよー！』

突然　ＩＳの開発者であり全国指名手配の人物が現れ唖然としていた報道陣たちは騒ぎ始めカメラをミミに向け拡大する。

ミミ『ここからは私の発表だからスコーリュンはもう戻っていいよ。』

なんであだ名で言うのかしら、と呆れた表情でスコールはミミ言う通り元いた場所に戻った。
ミミ『それじゃあ発表するよ！はっ！』
ミミは両腕を横に広げた。
するとミミの左右に光り輝く閃光が現れた。
ＩＳの展開時と同じ閃光だ。
そして閃光の中からＩＳのようなアーマードスーツが現れた。
ミミ『これは「インフィニット・バルキリー」通称「ＩＶ」、ＩＳの進化版アーマードスーツだよ！』
報道陣のカメラがＩＶに向けられる。
ミミはＩＶについて説明に入った。
ミミ『ＩＶはバルキリーで言うファイターに変形可能、そしてＩＳより遥かに機動性を超える優れた機体だよ。あっ、このＩＶの事言ってなかってね。紹介するよ、左のＩＶは「ナイトメアプラス」で反対側は「ナイトメアプラスＥＸ」、２機とも量産機だよ。』
ナイトメアプラス
名前の通りオズマたちの世界にある統合軍の量産型バルキリーである。
ナイトメアプラスＥＸも同じでナイトメアプラスの発展機でもある。

束はこの２機の量産型バルキリーをＩＶ化したのだ。
ミミ『あっ、そうそうナイトメアプラスＥＸは面白いんだよねぇ～』
この後、ミミは爆弾発言をした。
ミミ『実はナイトメアプラスＥＸは男性も乗れるんだよ！』
ミミが放った言葉に報道陣は騒然となる。
ミミ『どうやって出来たのかは教えないよ。勿論ＩＶの事もね。質問タイムはめんどいいからやりません。これでＩＶの発表を終わるねー』
そう言ってミミはナイトメアプラスとナイトメアプラスＥＸを収納し後にした。
ここで１０分の休憩に入った。
この１０分の間に各国は嫌、世界中はこの発表で混乱状態になっていた。

１０分後

ステージの真ん中に社長の翼とミミ、そしてパイロットスーツ姿の空と風馬が立っていた。

翼『ここからはバルキリーとＩＶの販売について説明します。休憩中に本社から数件購入についての電話が来ましたが……

バルキリーとナイトメアプラスこの２つは販売及び軍には提供しません。』

報道陣たちは騒然としたが数秒後に黙った。

翼『理由は簡単です。我が社はＰＭＣで商売しているからです。そして戦争になりかねないからです。特にバルキリーは完全に兵器ですから販売しません。なおナイトメアプラスＥＸについては女尊男卑に干渉されていない国だけに販売します。発売日は今日からです。』

ミミ『もしバルキリーやＩＶを強奪や解体して調べて自分の会社や国に渡したら―」

ミミはポケットから黒いスイッチボタンを報道陣に見せた。

ミミ『世界中のＩＳのコアをこのボタンでひとつで破壊するよ。そんなの嘘だって鼻

で笑っている人たち、ミミさんを誰だと思ってるのかい？ＩＳのコアを開発した生みの親だよ？コアひとつひとつに爆破装置付けてあるから馬鹿なことをしたら覚悟しといてね☆それじゃあ最後の発表に移るよ！ここにヘルメットをかぶった二人の男性がいます。この二人はデルタナイトの隊員です！自身の事情で名前と顔を映すことは出来ません。この二人はＩＳを動かせることが出来るんです！あともうひとり動かせる男性も居るよ！』

またＳＭＳ社は世界を騒がせた。

ヴァラヒアの襲撃

発表から1日が経ち新しい年、２０６３年を迎えた。
アメリカのハワイの海岸沖に建つＳＭＳ本社ビルの会議室では翼、空、風馬、ミミ、クロエ、ミハエル、スコールが集まっていた。
ミミ「さてさて、国際ＩＳ委員会のヤツらはどう動くかなぁ？」
前にミミは翼たちにＩＳとＩＶの戦闘データの収集の為ＩＳ学園に行く約束をした。
テレビ局にハッキングし翼たちがＩＳを動かせる事を言うつもりだったがＳＭＳの事やらナイトメアプラスとナイトメアプラスＥＸの開発に忙しかった為出来なかったのだ。
だが昨日の発表で出来た。
スコール「昨日は派手になったものね。」
自分のスマホでネットニュースを見て呟くスコール。
ニュースは全てＳＭＳで持ちきりだった。
まぁその話は後にしよう、と翼が会話を区切った。
翼「ＳＭＳは今急激な成長をしている。昨日でナイトメアプラスＥＸの売り上げで２

００億突破し依頼も多数来た。そこで俺たちは２つのプランを実行しようと思う。」
２つのプラン？とみんなは首をかしげる。
空「そのプランって何なの？」
翼は今から説明すると言って間を空けて説明を始めた。
翼「ひとつ目は宇宙船を作る事、２つ目は巨大都市型宇宙移民船団つまり宇宙を旅するコロニーを作る事、民間の対象者は生活に苦しんでいる者と女尊男卑に染まっていない者だ。この２つのプランを『宇宙進出計画』と名付ける。」
ミミ「はいはーい質問でーす！」
ミミは手を挙げ質問する。
ミミ「宇宙船って具体的にどんな宇宙船かな？」
すると翼は小さく笑いミハエルの方に視線をやる。
翼「なぁミシェル、あっちの世界のＳＭＳはバジュラやバジュラの母艦を殲滅する時は必ず『アレ』が必要だよな。」
ミハエル「アレって……まさかっ!?クォーターを作る気か!?」
ミハエルは驚きの余り席から立ち上がる。
翼「正解だ。お前がこの世界で眠っている間、バジュラはについての研究が進んでたんだ。バジュラは平行世界、つまりパラレルワールドに行ける特殊な能力を持ってい

る。多分お前がこの世界に来た理由はバジュラの幼生たちだろう。まぁ俺の場合は違うと思うけどな。」

少し間を空けて翼は言葉を続けた。

翼「バジュラはこの世界の宇宙に存在している可能性が高い、バジュラだけじゃない他の生命体も居るかもしれない。地球に侵略してくるかもしれないんだ。だから今の内に手を打っといた方がいいと思うんだ。」

翼の言葉にミミとミハエルは納得した。

すると中央のバーチャルモニターから電話が掛かった。

翼はそれを開くと自分のオフィスにいるオータムが映った。

翼「どうしたオータム？」

オータム『今さっき中国政府から緊急要請が来たぜ。上海上空にヴァラヒアが現れ巨大航空要塞と多数の戦闘機に襲われている、上海上空の航空要塞及びヴァラヒアを全力で追い出してほしいとの事だ。』

それを聞いた翼たちは眉を寄せ真剣な表情に変わった。

翼「上海がヴァラヒアに襲われている情報は本当なのか。」

オータム『さっき衛星から見たが本当だったぜ。今んとこＩＳ部隊が応戦している。でっ、どうする社長さんよ？一応中国との電話は繋がったまま、向こうはいくらでも出

すと言ってるぜ。』

一度、翼は目を閉じて考えた。

その間に完全に風馬が女尊男卑と化した国が助けを求めるなんて笑っちまうぜ、とポツリと呟いた。

そして翼は目を開き決断した。

翼「俺たち（デルタナイト）で行く。スコールはオータムと待機してくれ。」

翼の指示で全員その場に起立し「了解っ！」と声を張り小走りで会議室を出た。

翼「オータム、報酬についてはミハエルと話してくれ。」

オータム『あいよ。』

とある中国ＩＳ基地の寮であたしは居た。

あたしの名前は凰　鈴音。

軍のＩＳ代表候補育成部の隊員（生徒）として所属している今年で１６の女の子。

なぜあたしがこんな物騒な所に居るって？

それは、あたしとＩＳの適性が高いから。

そしてあたしが中国の代表候補生だから。
ここの国（中国）はＩＳの適正が標準を超えた者は強制的にあたしが居る所で四年間訓練して代表候補生になり日本のＩＳ学園に三年間行って国家代表になるか、それとも更に此処で三年間訓練し国家代表になる仕組みなの。
まぁ、あたしは途中でここに来たの。
理由は、両親の離婚が原因だった。
あたしの母は中国人で父が日本人だった。
つまりあたしはハーフって事なの。
離婚後あたしは母の方に引き取られ母の母国、ここ中国へ住み始めた。
中国へ来た時あたしはまずＩＳの適正検査を受けさせられた。
そして適正が標準を超えたあたしは軍に強制入隊させられた。
訓練は辛かった。
毎日走らされＩＳの勉強三昧。
でもあたしは平気だった。
何故ならもっと辛い事があったから。
今でもそれを引きずっている。
それはきついトレーニングとかじゃなく、精神的なもの。

あたしは父の仕事の関係で小学校二年生の終わりに日本に移り住んだ。
幼い頃父から日本語を少し教わっていた。
けど上手く発せれなかった。
理解はしているけど口から発する事は苦手だったからだ。
そのせいか学校で自己紹介した時、クラスメイトたちに笑われた。
あの時あたしは日本語が嫌いになった。
でもクラスの中でひとり笑わなかった男子がいた。
彼はつまらない表情で笑っている奴らを見ていた。
その時、あたしと彼は目が合った。
あたしは直ぐに視線を横に逸らした。
どうせあたしの事を笑う。
そう思った。
けどその予想は外れた。
彼はあたしに優しく微笑んだのだ。
織斑　一夏
あたしの最初の親友になってくれた人。
一夏は毎日あたしの事を思って日本語の勉強をしてくれた。

すると徐々にあたしは日本語が上手くなりいつの間にか二人の親友が出来た。
織斑　晴人
別のクラスで一夏と歳は同じだけど弟。
一夏と違って爽やか系。
五反田　弾
一夏の親友でひとつ下の妹がおり、1学年上の「布仏　虚」先輩を追いかけ回している。
あたしから見れば変態ね。
とにかく一夏はあたしの為にいろんな事をしてくれた。
一夏のおかげで日本語が好きになれた。
一夏のおかげで親友と呼べる友達が出来た。
あたしは次第に一夏の事が好きなった。
そして小学校四年の秋、あたしは一夏に「約束」という形で告白した。
あたしが料理上手くなったら毎日酢豚作ってあげる、と

簡単に説明すると「毎日に味噌汁作ってあげる」の中国版。
あたしは料理は下手だった。
だから約束したのだ。
一夏はニッコリ笑って「ああ、いいぜ。」と言った。
あたしは喜んで母から料理を教えてもらった。
そんな矢先だった。
あれは小学校五年の時だった。
その日は第二回モンドグロッソだった。
一夏と晴人は第一回モンドグロッソの優勝者でＩＳの日本代表の姉「織斑　千冬」の応援の為ドイツへ行った。
結果、千冬さんはモンドグロッソで優勝し連覇を成し遂げた。
けどそれと同時に一夏と晴人は行方不明になった。
あたしと弾は心配した。
クラスのみんなも心配していると思った。
けど違った。
逆だった。
クラスのみんなは喜んでいた。

出来損ないの二人が居なくなった、と。
何を言ってるの？
どうしてそんな事を言うの？
あたしは唖然としたまま一夏と晴人が行方不明になった事に喜ぶみんなを見ていた。
隣にいた弾は血が出るくらい拳を強く握って険しい顔でみんなを見ていた。
後から一夏と晴人の事を弾に聞いた。
その時まであたしは知らなかった。
一夏と晴人が虐められていたなんて。
原因は千冬さんの所為だった。
世間や周りから見れば千冬さんはモンドグロッソを二連覇した「ブリュンヒルデ」「完璧な人間」としか見てなかった。
そして一夏と晴人は周りから出来損ないと呼ばれ烙印を押され虐められてきたのだ。
モンドグロッソが終わった後、あたしは一回千冬さんの顔を見た。
清々しかった。
弟たちなんてどうでもいい顔をしていた。
それから数日後、世間は一夏と晴人を死んだと発表した。
あたしは受け入れたくなかった。

けどクラスのみんなは大喜びしていた。
狂っている。
みんな狂っている。
その場にいる先生も喜んでいる。
最低な奴らだった。
それから更に数日が経ち最悪な事が起きた。
弾が行方不明になった。
あたしは弾の妹「蘭」に聞いてみたらとんでも無い事を言ったのだ。
私があのウザいクソ兄を追い出しました☆
その瞬間、あたしは蘭を一発ぶん殴って家に帰った。
3日後日本政府は五反田　弾を死んだ事にした。
この時、涙が止まらなかった。
好きな人が死んで親友まで死んだ。
そしてあたしは一夏たちの事を全然知らなかった。
助けられなかった。
あたしは今も後悔している。
あたしは随分と変わった。

小柄だった身長と小さな胸が今ではモデル体型。
でもそれを見てくれる人はもうこの世に居ない。
その所為かいつも暗くひとりぼっちだった。
テレビをつけてマグカップに注いだコーヒーを飲んでいた。
基本あたしの朝はコーヒーを飲みながら朝のニュースで始まる。
普段朝食は食堂で食べている。
今日はバラエティーニュースを見ていた。
『イヤー昨日はすごかったですね。』
『今話題の民間軍事会社「ＳＭＳ」が発表会見しましたからねぇ。』
アナウンサーの男女二人がにぎやかに話している。
『特に社長「翼・リーゼ・バーフォード」氏が子供で、ＩＳを開発した科学者「篠ノ之束」こと「ミミ・リーゼ・ラビット」博士がまさかＳＭＳ社に居たとは思ってはいませんでした。』
昨日、民間軍事会社ＳＭＳが発表会見をしたらしい。
あたしは昨日、専用機のＩＳ「甲龍」の定期メンテナンスで開発元の方に届けに行っていたから見ていない。
甲龍は今日の朝に届くと聞いている。

テレビ画面がある男性……いや、あたしと同じ子どもが映った。
アナウンサーは喋り続けた。
『そうそう！今テレビに映っている方がＳＭＳ社の社長　翼氏なんです！』
その時、あたしはテレビに映っているＳＭＳの社長（男子）に驚いた。
一夏に似ているのだ。
髪型と体型が変わっているが確かに一夏に似ている。
『いやぁ驚きですよ、まさか子供が民間軍事会社の社長とは。』
『それだけではありません、彼はあの「英雄の騎士」なんですよ！』
でも一夏はこの世に居ない。
ただ似ているだけ。
あたしはコーヒーを飲み切ってテレビを消し部屋を出て食堂に向かった。
食堂に着いた。
今日は生徒たちにとって嬉しい休日。
食堂の人たちしか居なかった。
あたしはラーメンを頼みいつもの席で朝食を食べた。
すると整備担当の教師があたしの元へやって来た。
「ここに居たのか凰さん。」

鈴「どうしたのですか？」
箸を止め教師の方へ向く。
「十分前に君の専用機が届いたから後でＤ―１格納庫に来るように。」
鈴「わかりました、わざわざありがとうございます。」
あたしは教師に礼を言い、教師は少し微笑み食堂から出て行った。
止めていた箸を動かし再びラーメンを食べ始めた。

朝食を食べ終えたあたしは少し小走りでＤ―１格納庫へ向かった。
中に入ると目の前にあたしの専用機の甲龍が置いてあった。
格納庫はあたしひとりだった。
甲龍に近づき立体映像のように映し出されるキーボードを打ちながらシステムチェックに入った。
鈴「何よこれ!?何勝手に操縦系元に戻してんの？」
誰もいない格納庫であたしは怒鳴った。
操縦系をリセットされた事に腹が立った。
こんな事は初めてだ。
メンテをしてくれた事には感謝しているけど操縦系をリセットしてくれとは言って

ない。

鈴「ったくもぉ……」

ため息を吐いてあたしは操縦系を一から組み直し設定した。

その時だった。

基地全体に緊急警報のブザーが鳴り響いた。

鈴「えっ……」

一瞬このブザー音で何が起きたかわからなかった。

するとそれを打ち消すように放送が流れた。

『スクランブル、スクランブル、緊急事態発生、専用機持ち及び全ＩＳ部隊は上海へ急行せよ。繰り返す……』

あたしは甲龍をブレスレット（待機形態）に戻し急いで更衣室に向かった。

更衣室に入るとすでに隊員たちや機体持ちたちがＩＳスーツに着替えている。

あたしもこうしちゃいられないと自分のロッカーを開き急いでＩＳスーツに着替えまた外に出てＩＳを展開し仲間と上海へと飛翔していった。

上海へ飛行中司令部から内容を聞いた。

『諸君、緊急事態が起きた。去年イギリスで起きた大規模テロを起こしたテロ組織「ヴァラヒア」が上海上空に出現したとの事だ。情報によると航空要塞と約２５機のＦ―２２

と交戦中、だが向こうの回線が繋がらない為戦況はわからない状況だ。航空要塞はイギリスに出現したものと違うとの事だ。』

Ｆ―２２……確かＩＳが誕生する前アメリカのステルス戦闘機だったわね。

それにしても航空要塞か…まるでこの世界がアニメやゲームの世界に見えるわ。

微かだけど上海が肉眼で見えた。

ＩＳや戦闘機は見えないけど至る所から火災が起きている。

もう戦闘が始まっている。

今から行くのは「戦場」

あたし含めここに居るみんなは「戦争」を経験していない。

でもみんなは余裕な表情だった。

ＩＳには「絶対防御」があるからだ。

絶対防御は何でも防ぐ。

絶対に死なない。

誰もがそう思っている。

けどあたしはそんなエゴは信じない。

実際イギリスの大規模テロでＩＳが戦闘機にミサイルで撃墜されパイロットが死んだから。

そう思っていると少し横に
離れた所に黒い物体が見えた。
あたしは航空要塞だと確信しさっきの多数の火球はＩＳ部隊とヴァラヒアのＦ―２２が戦闘していると悟った。
オペレーター『間も無く戦闘空域に入ります。専用機持ちは交戦中のＩＳ部隊の援護を。他各機は敵航空要塞を排除及び撃墜してください。』
オペレーターの言う通りあたしら専用機持ちは機体の進路を無数の火球が出ている（Ｆ―２２と交戦しているＩＳ部隊の）方に向けた。
ひとつだったＩＳの群れがオペレーターの指示で二つに分かれた。
徐々に戦闘空域に近づく。
そして二刀の剣を持ち戦闘空域には入った。

戦場での再会

アメリカ　ハワイ
ミッドウェイの海でラビットハウスが錨を降ろし停まっていた。
ヘリで来たデルタナイトの三人とミミ、ミハエル、クロエは急いでいた。
デルタナイトの三人は控え室でパイロットスーツに着替えバルキリーが置いてあるハンガーへ、残りの三人は司令室で自分の持ち場についた。
風馬のバルキリーはオレンジカラーのラインを持つＶＦ―２５Ｓ。
空は赤のラインカラーを持つＶＦ―２５Ｆ。
前（発表会見）に二人は量産機で登場していたが本命はこのＳとＦ。
もちろん翼は全身ブラックのＶＦ―２７　ルシファー。
空と風馬はバルキリーに通常パック（スーパーパック）を装備した。
それぞれ自分のバルキリーに乗り込みシステムを起動させエンジンを起こす。
そして異変がないかチェックし空へと上がった。
ラビットハウスから１キロ離れたところでミミから連絡が入った。

ミミ『よーし！そろそろジャンプしていいよ三人とも！』
ジャンプ
ジャンプクォーツを研究員と束とが研究し開発したテレポーテーションシステム。
バルキリーに搭載されているフォールドクォーツの代用ジャンプクォーツを使って行われる。
各バルキリー1機ずつシステムに搭載されている。
もちろんルシファーにも。
クロエ『今回ジャンプの操作は此方で行います。』
コックピットの横窓に映る立体モニターが起動し世界マップが表情され少しずつ中国の上海へと縮小されマッピングされる。
クロエ『ジャンプ先をセットしました。』
翼「了解した。ナイト1より各機へ、ジャンプ後直ぐ戦闘だ。ここで安全装置を解除しろ。」
空『了解、安全装置解除。』
風馬『同じく安全装置解除。』
三人は安全装置を解除しバルキリーがいつでも攻撃出来るようになった。
クロエ『ジャンプ開始まで3秒。3、2、1、ジャンプ開始。』

すると翼たち目の前に大きな青い渦が出現した。
まるでフォールドのようだ。
これがジャンプの入り口。
翼たちは吸い込まれるようにジャンプした。

あたしの目の前でＩＳに乗っている先輩や隊員たちが次々とミサイルや機銃から出てくる弾丸で悲鳴を上げ黒焦げになって下に堕ちて行く。
「ＩＳには絶対防御があるんでしょ!?なんでみんな死ぬのよ!?」とチャンネルで叫ぶ者もいた。
攻撃してもＦ―２２に避けられ逆に攻撃される。
ＩＳは戦闘機よりも機動性が高い、それに武装の数が多い。
けどベテランのパイロットならどうだろう？
機動性が高くなくても相手の攻撃を避ければ、武装が少なくても確実に狙えば話は別だろう。

あたしは必死に両肩に搭載されている衝撃砲で戦った。
しかし全て避けられる。
同時に四発のミサイルを放ちこっちに向かって来る。
甲龍にはフレアやチャフは付いてない。
回避し次の攻撃をと思ったその時。
航空要塞から大型ミサイルが発射された。
大型ミサイルは真上へ飛ぶ。
そして爆発した。
爆発は大きく狐色のようで赤色のような色で空を染める。
信じられない事が起きた。
航空要塞の撃墜に向かっていた隊員たちが「溶けて」しまった。
巨大な爆発を起こした大型ミサイルの熱によってＩＳごと溶解してしまった。
その影響はあたしのところまで来た。
鈴「きゃっ！」
ふたつの衝撃砲が少しずつ溶けてゆく。
同時に甲龍のシステム回路がショートしスパークが飛び散る。
影響を受けたあたしは落ちていった。

ああ、これがあたしの最期なのね。
やっとあんたのところに行けるわ、一夏。
あたしは目を閉じ死を待った。

けどあたしは死ななかった。
誰かが優しく包むようにキャッチしてくれた。
それは大きな黒い手だった。
大きな黒い手の正体は黒い戦闘機だった。

上海にジャンプしたデルタナイトの三人が最初に見たのは空の色だった。
空『まだ現地時間じゃ昼前なはず、なんで夕方みたいに空の色が……』
何かが爆発した事には違いない、と翼は思い。
辺りを見渡す。
するとヴァラヒアの航空要塞を見つけた。
その上にミサイルか何か発射した雲の後があった。
風馬『どうやらあいつ（ヴァラヒアの航空要塞）が原因だな。』

翼「だとしたら周囲を高熱で溶かす反応弾みたいなミサイルを放ったな……ん？」
翼は視線が止まった。
視線の先には黒煙を上げる壊れかけたＩＳを纏った少女が落ちている。
このままでは地面に激突する。
翼はフルスロットルで少女の方へと向かった。
少女に近づきバルキリーをガウォークに変形し左手で落下する少女を受け止めた。
翼は目を疑った。
助けた少女が幼馴染の凰　鈴音だったから。
目を閉じていた彼女は目を開けこっちを見る。
外見が変わっているがはっきり鈴だとわかる。
その時、コックピット中に警報アラートが鳴り響いた。
２機のＦ―２２が此方に接近し機銃で襲い掛かってくる。
がしかし翼の後を追ってきた空と風馬がガンポッドで撃墜した。
二人はバトロイドに変形し周囲を警戒しながら翼に近寄る。
風馬『大丈夫か翼？』
翼「ああ、大丈夫だ。」
空『全く、いきなり飛び出したと思えば人助けか。』

風馬と空は翼が助けた相手が鈴だと気付かない。
するとまた警報アラートが鳴り響く。
敵も此方に気付きこっちらに向かって来た。
風馬と空はガンポッドで弾幕を張り近付けないようにする。
鈴を地上に降ろす暇がない翼はコックピットを開け鈴を乗せたルシファーの左手を近付ける。
翼『乗れ！』
スピーカーで声を掛け手を差し伸べてる。
鈴は返事も頷きもせずＩＳを収納し翼の手を握って後ろの席へと入った。
コックピットを閉め再び翼は操縦桿を握り締める。
翼「ナイト２（空）、ナイト３（風馬）移動するぞ。後に付いて来い。」
空『了解。』
風馬『了解。』
ルシファーをファイターに変形させる。
翼「揺れるぞ。」
スロットルを上げる。
鈴「えっ？いまなんｔ……きゃぁぁぁ！」

ルシファーは急上した。
弾幕を張っていた空と風馬もファイターに変形し後を追うように飛翔した。

あたしはバルキリーの後席に乗っている。
落ちているところを助けられたのだ。
このバルキリーは「英雄の騎士」と呼ばれそれを操っているのが社長の翼・リーゼ・バーフォード。
つまり翼・リーゼ・バーフォードが操縦している。
ＳＭＳの最高責任者が自分の部隊を連れてやって来たのだ。
ヘルメットで見えないけど髪型と体型以外全て一夏に似ている。
けど今はそんな事考えていられない。
急上昇しているバルキリー。
あたしはＧに耐え切れず悲鳴に近い声を上げてしまう。
１０秒間ぐらいだったか。
急上昇を終えたのか機体が水平になった。
Ｇに解放されたあたしは息荒れていた。

すると翼・リーゼ・バーフォードはヘルメットを外し後席にいるあたしに話しかけてきた。
翼「大丈夫か？」
やっぱりあいつに似ている。
鈴「はぁ…はぁ…あたしを見て言える？……」
翼「大丈夫じゃない……か。」
当たり前よ！
初めて戦闘機（バルキリー）に乗って体験した事もないＧに襲われたって言うのに。
次に彼は視線をコックピットの外に向け敵の様子を伺い始めた。
すると左右からバルキリーが下から現れた。
空『此方ナイト2、で？どうするの。』
風馬『此方ナイト3、敵さん此方の存在に気付き始めたぜ。全力で俺たちを排除する筈だぜ。』
この二人の声、似てる…
まさか…じゃあやっぱり……

敵の様子を伺っていた翼は空と風馬に命令を下した。
翼「見た所、２５機のＦ―２２は此方に接近してくるが航空要塞は上海を襲撃中……このままだと上海が堕ちるのも時間の問題だ。ナイト2、ナイト3、敵戦闘機を各個撃破しろ。俺は彼女を置いてから敵航空要塞に乗り込んで海に進路を変えさせる。いいな?」
空『了解!』
風馬『了解!』
翼「全機っ!プラネットダンス!」
翼の声と同時にＶＦ―２５Ｆ、ＶＦ―２５Ｓがルシファーから離れヴァラヒアの戦闘機（Ｆ―２２）を撃破しに向かった。
翼は前を向いたまま後席にいる鈴に言葉を話しかけた。
翼「今からお前を地上に降ろす。」
鈴「……いいえ、このままあんたとあの馬鹿でかい飛行船に乗り込むわ。」
鈴は拒否した。
翼「お前何を言っているかわかるのか。いくら何でもー…」
鈴「あたしは軍人よ。国民を守る、それが義務なのよ!昔あたしは誰一人守れなかっ

た。けど今は…力がある、みんなを守れる！」
鈴は頭の中に一夏を思い浮かべた。
彼女の思いが伝わったのか、翼は考えるのをやめた。
翼「まぁいい。途中何を言っているのかわからなかったが軍人としての意志はよくわかった。だが航空要塞に乗り込むんだ。お前のＩＳはボロボロ、どうやって戦うつもりだ。」
鈴は小さく笑った。
鈴「大丈夫よ、部分展開すればいい話よ。」
鈴の口調が変わった。
とても明るく嬉しそうだった。
まるで子供だ、と翼はそう思いため息を付き再びヘルメットを被りルシファーを操縦する。
そしてルシファーは敵航空要塞に彗星の如く向う。
それに気付いた敵航空要塞は対空機銃や対空ミサイルで近づけさせないように弾幕を張る。
だが翼にとって、ルシファーにとって弾幕は無意味。
全ての対空機銃、対空ミサイルをマイクロミサイルとライフルポッドで無効化した。

ルシファーはライフルポッドで敵航空要塞中央の上部に貫かない程度に一発穴を開け、入り口を作りガウォークで上部に着陸した。
翼「行くぞっ！」
鈴「ええ！」
翼はコックピットからルシファーの左手に乗り後席にいる鈴に手を差し出す。
鈴はその手を掴みコックピットを降りルシファーの左手に乗った。
猛烈な突風が鈴を襲いバランスを崩す。
翼は急いで鈴の腕を掴み突風で吹き飛ばされないよう右手で彼女を抱きしめる。
鈴も翼に抱きつく事しかできなかった。
ルシファーの左手はゆっくりと下がり敵航空要塞の装甲へ着いた。
翼は鈴を抱きしめたまま持ち上げライフルポッドで穴を開けた場所へと向かった。
翼「中に入るぞ！」
鈴「もーいいからはいってー！」
突風で目が開けられない鈴は大声で叫ぶ。
ＩＳなら絶対防御で遮ってくれるが彼女は今ＩＳを展開していない。
彼女にとって突風に煽られるのは初めての事だろう。
翼は穴の中へと飛び降りた。

「くそ！どこへ隠れやがった！探せ！見つけ次第殺せ！」
「「はっ！」」
廊下でファマスを構え赤いベレー帽を被り戦闘服を身に纏っている男は彼方此方で散らばっている部下たちに苛立った口調で命令を飛ばす。
探しているのは自分たちの航空要塞「スピリタス」に乗り込んで来た敵、即ち翼と鈴。
スピリタスに乗り込む事が出来た翼と鈴はある部屋に隠れている。
急いで入ったから真っ暗で何も見えなかった。
鈴「何でこんなに暗いのよ！」
小さな声で叫ぶ鈴。
翼「仕方ないだろ、元はと言えばお前が原因だ。」
冷静な声で鈴にそう言う翼。
翼（あんな事にならなかったらこんなに敵が素早く警戒態勢にはならなかったんだ。）
少し遡る事数分前。
穴から飛び降りた翼と鈴は着地した。
鈴は翼が抱えていたため何も怪我をしていない。
翼も同様、サイボーグの彼は何階から飛び降りたって平気である。

周りを見渡す翼。
どうやらここは廊下。
ライフルポッドのビームで周りは黒焦げ、遠くから警報音が鳴り響く。
ここは何階かわからない。
とりあえず右腕で抱きかかえていた鈴を解き。
ガンボックスからＭ４を展開する。
がしかし、それは鈴の怒鳴りで止められた。
鈴「何で飛び降りるのよ！普通ラペリングとかするでしょうが！」
翼「静かにしろ、敵の中だぞ。」
翼はパニック状態の鈴を小さな声で止める。
その時、遠くから奥から荒々しい足音が複数翼の聴覚が捕らえた。
鈴の大声で敵に気付かれた。
ガンボックスから即座にＭ４を二丁召喚し足音が聞こえる方へ連射した。
すると角の左からヴァラヒアの兵士たちが次々と現れる。
そして翼が放ったＭ４の銃弾が兵士たちの脳や心臓を開ける。
一方の鈴はいきなり翼がＭ４を取り出しそして発砲した事に驚き蹲る。
今度は反対側から敵が現れた。

左手に持つＭ４を反対側の敵兵に向け連射する。
翼「おい、いつまでそうしているんだ。お前も反撃しろ。」
鈴「だってあたしの武器全部剣だもん。」
鈴の言葉に心の中で大きくため息を吐く。
その間に二丁のＭ４は弾切れになった。
直ぐにＭ４を放り捨てガンボックスからグレネードを2個展開し素早く敵の方に投げる。
再び二丁のＭ４を展開する。
翼「移動するぞ。」
鈴「えっ⁉？ちょっ待ってよ⁉」
鈴は翼を追いかける形で共にブリッジに向かった。
しかし敵の対応が早く中々ブリッジにたどり着けず今に当たっている。
鈴「言い忘れてたけど、何であたしが原因なのよ！」
翼「お前がギャーギャー騒いだ所為で敵に見つかった。それが原因だ。」
本当なら敵に見つからないようにやりたかった。
鈴「そりゃああそこから飛び降りたら誰でもなるわよ！」
翼「……お前本当に軍人か。」

よくやっていけれたな、と翼は思いため息を吐く。
部屋が暗い中、翼は辺りを見渡す。
翼（まずは明かりが必要だな。）
此処の安全確保と此処がどんな部屋なのか、翼はガンボックスからライト付きのＭ４を展開しライトを点け電気を探し始めた。
鈴「ちょ…ちょっと、どこ行くのよ。」
さっきとは一変、鈴は弱々しい声で翼に訪ねた。
翼「電気を探してる。」
そう言っている間に扉の横壁に電気を点ける電源レバーを見つけた。
翼はレバーを掴み上に上げた。
暗かった部屋が一瞬で明るくなった。
コンピュータや実験用器具が沢山ある。
此処は実験や研究をする部屋だと翼は判断した。
すると奥にガラスで覆われた２つ円柱型のカプセルが視界に入った。
２つとも人間がひとり入れるサイズで中身は緑色の液が入っている。
だがその中に人影があった。
翼はカプセルに近づく。

そして人影の正体が明らかになった。
翼「なんだこれは……」
少年だった。
２つのカプセルの中に酸素マスクを付け目を閉じている二人の少年が緑色の液に漬けにされていた。
ひとりは黄色い髪をしておりもうひとりは茶髪だった。
とてもヴァラヒア兵とは思えない。
むしろ平凡に暮らしている民間人だ。
だが少年たちは人外骨格のようなものを装着していた。
まるで人造人間だ。
鈴「対ＩＳ兵器……サイボーグ……」